

心理臨床の

広場

特集

① 受験の心理学

② 心理臨床のフィクション
とリアル

対談

三秋 継×葛西真記子

WORLD MAP

現代の米国の子どもの心理療法家

エイミー・ジョエルソン先生



24

Vol.12 No.2 Mar. 2020



一般社団法人
日本心理臨床学会



葛西 今回の対談を三秋先生にお願いした理由なんです。が、「生きていく意味がわからない」と語っていた方が先生の本を読んで、「次の本が出るまでは生きていよう」と言うようになったことがあって…。

三秋 はい。

葛西 その方に薦められて私も先生の作品を読み始めたんです。そうしたらすごく面白くて。人と人との関係や気持ちの繋がりとというのがしっかりと描かれていて…。もともと先生はどういうきっかけで小説を書こうと思われたんですか？

三秋 そうですね。中学生の頃に時間を持て余していた時期があって、よく本屋で時間を潰していたんです。特に小説に関心があったわけではなかったんですが、あるときふと、「自分のように根暗な人間が小説を読まないのはおかしいんじゃないか」というふうに思って、適当に一冊手に取ってみたんです。たまたまそのときに読んだ本が、すごく自分

と波長が合ったというか、ようやく自分と同じようなことを考えている人を見つけたらと思えるようなものだったんですね。悲観的な思考とか内向的な思考が作品として昇華できるものなんだということにすごく感激したというか。そのときから、小説を書くことを考え始めたんだと思います。

それまでは自分と似たような思考回路の持ち主にまったく出会えなくて、エイリアンみたいな感覚を常に覚えていたんです。ですがその本との出会いを通じて、ようやく「仲間を見つけた」と思えました。

葛西 だから小説の中に出てくる登場人物も、最初は周りの人と繋がりをあまり感じていなかったり、自分を受け入れてくれる人はいるのだからかと悩んでいる人が出てきて、そういう人が誰かと出会う。誰かと出会って心が揺れるというところが描かれているのでしょうか？

三秋 僕が当時本から得た「ようや

巻頭対談

Suguru Miaki

三秋 隼 × 葛西 真記子

Makiko Kasai



KADOKAWA / メディアワークス文庫

く仲間と出会えた」という感覚を、そのまま小説に書いているとも言えるかもしれない。

アイデアの出発点

葛西 先生の小説には日常じゃない話が出てきますよね。例えば、『スターティング・オーバー』は一〇年前に戻る話でし、『三日間の幸福』は自分の寿命を買ってくれる人があるという話です。でも私は読んでいて、もしかしたら私たちが知らないだけで、実際にこの世界にはそういう人もいたり、そういうことが実はあつたりするのかなと思うんです。まったくのSFでもなくて、すごく日常というわけでもないところにとっても惹かれます。

三秋 僕は物語を書く際に何か嘘を一つだけ設定するようにしていて、その嘘だけは僕と読者の共通のルー

ルとしてお互い目をつむる、ということにしています。その嘘の外側では、極力本当に現実が存在している人間が社会の中で生きていく姿を書くようにしています。

葛西 そういう設定や次はこういう物語を書こうというアイデアは、どこから出てくるんですか？

三秋 自分の中にある切実な不安や願望といったものが基盤になっています。何気ない生活を送る中で、自分はどの種の感情にすごく執着しているなと気づいたときなんか、アイデアに繋がる場合が多いですね。

これは色々な場所で話していることなんです。僕が『三日間の幸福』の根幹となる着想を得たのは二二歳のときでした。周りの人たちが就職を決めている中、自分だけは就活すらしていないような状況だったんです。ある日、友達と一緒に公園でビールを飲みながら、「どうせなら太

く短く生きたい」みたいな話をしていたんですけど、そのときふと思っただんですね。自分みたいなどうしようもない人生を送っている人間が、寿命の半分を売り払ったところで大した値はつかないんじゃないか、むしろ処分料を請求されるんじゃないか、と。その考えの皮肉な部分が入って、物語にしてみようと思っただけなんです。

葛西 『君が電話をかけていた場所』や『僕が電話をかけていた場所』も、やっぱりあれも何かきっかけがあつて出てきたのですか？

三秋 誰でも、自分の顔がもしもつと整っていたらとか、自分の背があと何センチ高かったらとかいう話をするじゃないですか。その欠点さえ改善されれば幸福になれるとでもいうように。でも実際にそうした欠点を取り除かれたとして、それだけで本当に幸せになれるのかなという疑問を常々感じていて。本質的な問題は得てして本人の意識の外にあるのではないかという発想からスタートした話ですね。

葛西 ああ、なるほど。美容整形を一回したら、もうずっと繰り返している人とかいますものね。クライエントさんの中にも、今はこの病気に



KADOKAWA / メディアワークス文庫

なっていて、これさえなくなれば、自分もつといい学校に行けたのに、もつと幸せになれたのにという人がいます。

三秋 ある意味でそれは「救い」なんです。病名があることによつて、対象を自分の根っこから切り離せるから。ある意味で慰めになるというか、責任を引き受けてもらえるようなところつてありますよね。

葛西 そうですね。どんな病気にかにもよるけれども、私もクライエントの話も聞いていて、「その病気が完全になくなることはないかもしれない」と思いながら、だからこそ、この人が生きていくためには、その病気を受け入れたり、どうやって付き合っていくかを考えたり、そういう方向に行かないとたぶん難しいだろうなと思ったりすることもありますが。

三秋 『恋する寄生虫』はまさにそ



KADOKAWA / メディアワークス文庫



KADOKAWA/メディアワークス文庫

のような思考から生まれた話で、作中の人物に共通する性向——内向的で、どうしても他者とかかわり合うことを拒否してしまうような姿勢——を具体的な病気に、この作品では寄生虫という形にして全部その責任を押しつけられたら、それはすごく楽なことだろうなと思ったんですよ。

葛西 ああ、そうなんですか。

三秋 それが出発点でしたね。一方で、その寄生虫がいなくなったら、うまく社会に溶け込んでいって幸せになれるかというと、多分そうでもない。僕自身の過去を振り返ってみると、そういった悲観的な傾向は、僕のことを救っていたように思えるんですよ。それによって、一番致命的な打撃だけは避けることができたというか。

葛西 うん、うん、うん。

三秋 そう考えると、おそらくその



KADOKAWA/メディアワークス文庫

虫が消えてしまつたら、逆に本人たちは困ることになるのではないか、という逆説に面白味を感じて、あの話ができました。

「死」と「記憶」

葛西 先生は他の方の作品もよく読まれると思うんですけど、『一〇〇万回生きたねこ』ってご存知でしょうか？

三秋 はい、僕も大好きな本です。

葛西 私はあの本を読んだときに、主人公のねこが九十九万九千九百九十九回生き返ったあとに白ねこに出会って……というところで、出会って自分がその白ねこのことを好きになって、そのねこと一緒にいるだけで幸せだなと。だからもう生き返らなくてもいいと考えたと思うんですけど……。

三秋 僕は『一〇〇万回生きたね

こ』の話になったときは必ずこれをたずねるようにしているんですが、なぜねこは、次は生き返らなかつたのだと思いますか？

葛西 私が思ったのは、次に生き返っても、もう白ねこはこの世にいないので、もう白ねこと過ごしたことが、それだけ十分だと思ったのかなと感じたんですけれど。

三秋 じゃあ逆に、それまでは満足していなかった？

葛西 そうそう、そうですね。

三秋 僕はこの話についてちょっと独特の意見を持っているんですが、主人公のねこは自分が死ぬたびに、飼い主たちが悲しんだりすることをすごく不思議がっているようなところがあつたと思うんですよ。

葛西 ああ、なるほど。

三秋 でも、いざ自分の愛した白ねこが死んだのを見たときに、「ああ、誰かに死なれるっていうやなことなんだな」と気づいたんじゃないでしょうか。そこで初めてねこは、「じゃあ自分も死ぬのはこれで最後にしよう」と思ったのかなと。

葛西 自分が死んだときに、周りの人が悲しむということを知っていたいなかった？

三秋 それをようやく理解できた。

葛西 ああー。

三秋 誤読かもしれないですけど(笑)。

葛西 いやいや、確かに自分が誰かがいなくなつて悲しいという体験をしないと、わからないですよ。

三秋 そういふ視点を得たことが、ねこが生き返らなかつた理由なのかなって。僕は、最初からずっとそう思っていて、他人の解釈を耳にする、毎回驚くんですよ。

葛西 「死ぬこと」というと、先生の小説の中にキルケゴールの話が出てきたりしますね？

三秋 「死に至る病」ですね。「死に至る病」とは絶望のことである。

葛西 絶望というのは、人にとつてはもうこれ以上、生きていけないということなのかなと？

三秋 人が絶望したとき「死」は消去法的にもすごく魅力的になつちゃうんじゃないか、とは思いますが。



早川書房

葛西 死を選んじやうというのは、

絶望したけれども、また次頑張ろうというふうになるより、もうその絶望が大きければ大きいほど、次が見えなくなつて死を選ぶという感じでしょうか？

三秋 絶望というのは基本的に立ち上られるものではなくて、文字通り「絶えて」と思うんですね。そうなつたとき、たとえば自分みたいな信仰のない唯物論者は、救いというものをポジティブなものの中には見出せなくなるんです。そのとき唯一救いとなるのは、誰でも最終的には死ぬし、そこに至る過程はどうあれ、結局は同じ場所に行くということです。それって、ある意味ではものすごく公平で、安心できることだと思ふんですよ。死を理不尽な怪物と考えるのではなくて、万人に平等に与えられる安息と捉えたと、「死」というものがある種の救済になるんですよ。

葛西 それは確かにそうですね。

三秋 人にとつて、もし公平な瞬間があるとしたら、生まれる前と死んだ後だけなので。

葛西 確かに「死」に対しては、どんなにお金持ちだったり成功していると同じですしね。

先生の書く物語には「記憶」もキーワードみたいに出てきますけれども、人間はやつぱり嫌なこととか悲しいこととかを忘れられるから生きていきますよね。過去の失敗とか失恋とか、ずつとありありと覚えていて生きていけないですし。

三秋 「忘却」もまた「死」と同じように、ある種の救いだなと思つていて。『夢が覚めるまで』や『君の話』を書く前に、記憶に関する本を読み漁つたのですが、その中に過去を一切忘れることのできない病について書かれたものがあつたんです。やつぱりそういう人たちは、例外なく苦しんでいたんですよ。人生の一番悲しい瞬間というのを、本当に今起きているかのように目の前にありありと思ひ出すことができ、絶えずそういつた悲しみにつきまとわれている。何もかも覚えていられるとして、必ずしもいいことばかりではないはずですよ。

葛西 そうですね。トラウマなどを体験した人は、フラッシュバックといて、本当にありありとそのことを思い出すというか、そういう体験があつて精神的にすごくしんどいです。しかも体験が強烈であればあるほど、忘れられないですしね。

そうしたことに對するカウンセリングがあつて、完全に忘れることはできないけれども、少しずつ自分を納得させていくというか。例えば、子どもの頃に何かあつたとしても、今の自分はまだ大人だし、もし同じようなことが起こつても何か違う対処ができるはずだと。何回も思ひ出すんだけれども、そのことを自分の中で思つているのではなくて誰かに話すとか、そういうことによつて、少しずつでも忘れたり、自分で何とかして生きていけるようになるのかなと思ひますね。

三秋 その記憶を自分の受け入れやすい形に組み直す、つまり「リフレーミング (reframing)」することが、僕は何より大事だなと思つています。最近聞いて面白いと思つたのが、僕の小説を読んだあと、孤独や悲しみといったものをまるで肯定的な感情のように錯覚する、空しい人生を送れば送るほど、自分が物語の主人公であるかのように思えるという感想を目にしたんです。これはまさに僕の小説を通じて、孤独の受け入れ方だとか、ネガティブな記憶の捉え方がポジティブな方向に変わったのかなと思つて。僕の本が一種のリフレーミング装置みたいなものとして機能

能したのかもしれない。

葛西 カウンセリングの中でも、自分の記憶を話しているうちに、すごく悲惨な体験だったことは間違いないんですけど、でも実はそこに誰か自分を助けてくれる人がいたとか、実はあのとき周りにはみんな自分のことを嫌つていたわけではなかったなみたいな、新たな視点が出てきたりとか、そういうことがあるので。やつぱり語り直すというか、語り直しながら自分の中で自分の人生が塗り替えられていくということはありますね。

三秋 ある程度までは、記憶つて自分の好きな形に変えられるというか、そもそも絶対的な過去というものは存在してなくて、記憶という解釈だけが存在しているというか…。

葛西 そうですね。忘れられるし、形を変えられるみたいなことはあると思ひます。

三秋 僕はある時期までは日記をつけていたんですけども、それを読み返すと、自分が想像よりもずっと多くを忘れてることに本当にびっくりするんですよ。こんなに重大なことがあつたのに忘れてしまったのかと。人間の脳というのは本当に都合良くできているなと思ひましたね。

若者が置かれている世界

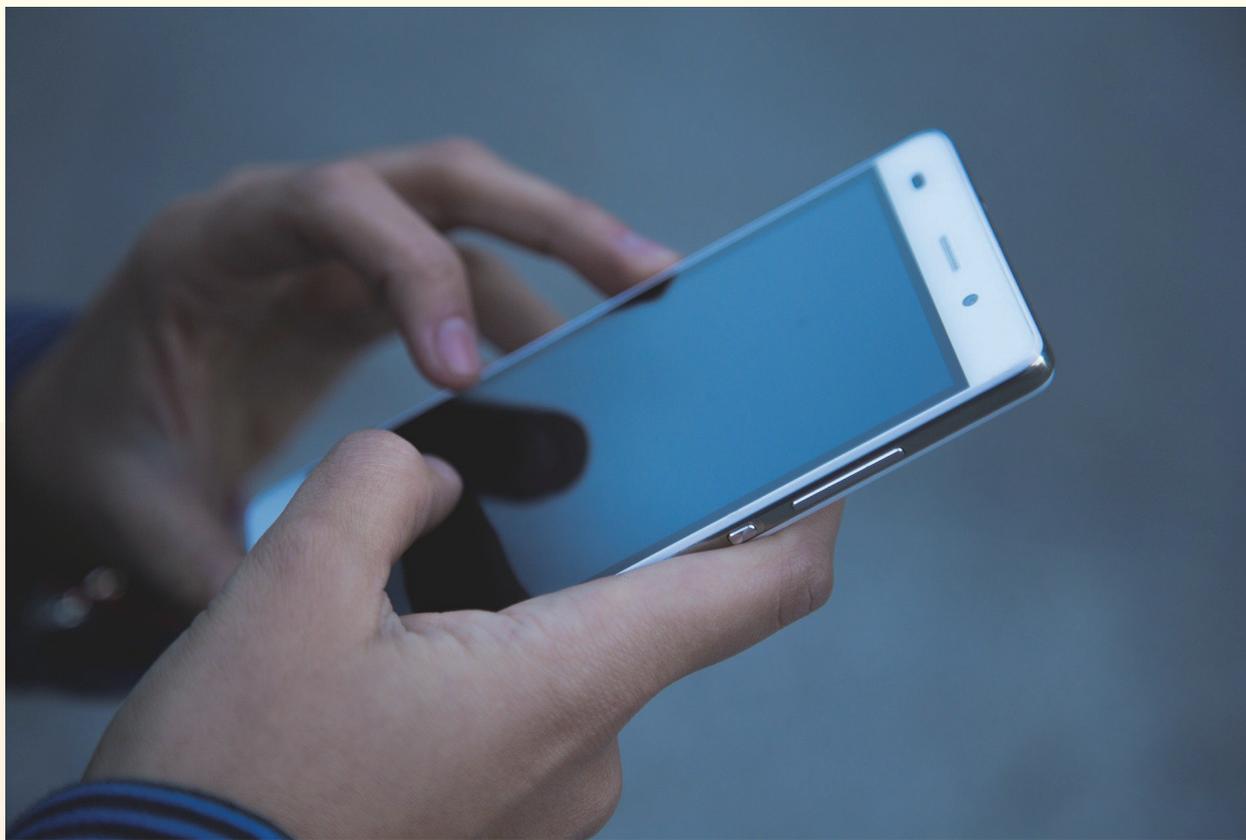
葛西 この雑誌はカウンセラーや心理の専門家、またはそうした職業を目指している人が主な読者なんです。彼らに何か伝えたいことってありますか？

三秋 僕などより専門家の方々のほうがよほど深く考えていることは承知の上で、強いて言えば：最近不登校をしている人に「逃げてもいいんだよ」と促す人が増えてきているじゃないですか。

葛西 ああ、ありますね。

三秋 それ自体は確かに良いことだと思います。ただ、僕自身も学校はあまり好き نبودりではなかったのですが、自分から休んだことは一度もなかったんですね。というのも、立派な心がけをしていたとかそういうわけではなくて、たぶん自分は一度でも逃げたら二度と戦えない、一度でも折れたら二度と立ち直れなくなるタイプだったので、絶対に折れるわけにはいかなかったんです。だから病気以外では、一度も学校を休んだことはありませんでした。

世の中には僕のように、折れにくいけれども、折れたら二度と立ち直



れない人もいて、そういう人を安易に逃げさせてしまうと、プライドが折れてしまつて二度と立ち直れないというようなこともあり得ると思うんですよね。

だから、本当に不登校に関してはケース・バイ・ケースで、一概にこうと決めつけるべきではないなとは思っています。

葛西 本当にそうですね。不登校もいじめもそうですが、本当に一人一人違うし、どういう状況かによりますね。ただ、やっぱりいじめからの自殺とか、死にたいと思つている人は何とか止めたいとは思ってますけど。先生の小説の中にもいじめを受けている人が出てきたりしますが、そういう状況を理解してくれる人が周囲にいたり、そのことを誰かに言えたりするとすごく違うんだろうなと思います。単に「いじめられたら学校へ行かなくていいよ」という話ではなくて。

三秋 そうなんです。本当に人によりけりというか。一番間違つた選択肢が正解ということも、人によってはあり得ると思うんです。

葛西 今つてすごく便利な世の中になつて、いろんな人とすぐにSNSで繋がったりするけれども、でも、

みんな何かちょっと孤独だったり寂しかったり、そういうことを思ったりもしますよね。

三秋 そうですね。繋がれる可能性が増えたことで、逆に誰とも繋がれていない状態というのがものすごく鮮明になっちゃったということもあると思うんですね。

葛西 高校生でも常に携帯を見ていたり、誰からもLINEとかそういうものが来ないとすごく恐怖だったり、すぐに返事をしないと仲間外れにされちゃうとか。もしくは自分が知らないところで、クラスのほかの人が繋がっていて、実は遊びに行っていたとか。そういうことを写真がアップされて間接的に知るといったとがありますね。

三秋 でも一長一短だと思えますね。顔も知らない人を相手にコミュニケーションすることもできるようなので、そこに救いを見出している人も一方では結構いると思うので。

葛西 例えば私は今、セクシュアル・マイノリティの人のカウンセリングをする機会が増えていますが、自分の学校の中に、自分と同じような人がいるのかわからないし、カミングアウトしている人が少ないので、それでやっぱり中高生の人と

かは死にたいと思ったたり、自殺未遂をしたりする率がすごく高いんですね。

そういう人がネットでもいいので知り合いができたり、自分と同じようなレズビアンやゲイの人がこんな仕事をしているとか、こんなところにいるというのがわかるだけで、その人の人生のモデルになったり、もしくは実際に知り合えたり、こういうことはすごくネットが使えるようになってよかったことに思うんですね。

三秋 僕自身は中学生ぐらいからネットを使い始めたんですけど、別の世界があるというか、自分が今住んでいるここだけが世界ではないという感覚に救われたので。

葛西 学校にいるときは学校だけがすべてと思っちゃったり、そこにある規範というか、そういうのがすべてみたいな思いますが、学校で人気の人と、社会に出てから人気のある人とかは全然違ったりしますよね。

三秋 だから今の若い人たちや一代の人ってすごく冷静な人が多いですね。初めから世界が広く見えているので。そういうところはうらやましいなと思っています。



葛西 それは、ここだけではないとわかってるからですね？

三秋 はい。一方で可哀想だなと思うのは、初めから自分が「すごくない」と思い知らされてしまうことですね。今ではネットを見れば、自分よりも若くて才能豊かな人がいくらでもいることが可視化されているので、井戸から放り出されてしまった蛙じゃないですが、誰もが誰かに劣等感を覚えざるにはいられない状況に追い込まれているように思えます。

葛西 ああ、確かに。やっぱり一長一短ですね。

三秋 何かを始める段階では、ある種の視野の狭さも必要ですよ。自分の未熟さがまったく目に入らないうちに力をつけておかないといけない。目が肥える前に始めなければ、大抵の人は途中で自分を見限ってしまうんじゃないかなと。

「ものがたり」の効用

葛西 もう次の作品の構想は頭の中にある感じですか？

三秋 はい、すでに書き始めています。

葛西 ああ、そうなんです！ いやあ、私に先生の本を勧めてくれた

方にお伝えしておきますね（笑）。

今日先生と話したこととか、その人に報告しようかなと思っているんですけど、そんなふうに言われるとちよつと責任を感じてしまいますか？

三秋 どうでしょう。僕は作家としての自分と現実の自分がある程度切り離して考えているので。

葛西 本当に？ それはどうやって切り離すのですか。三秋継という小説家と自分は別物…？

三秋 そう考えていますね。今この瞬間はどっちかと言われたら、八割ぐらい三秋継でやっているのかなと思いますけど。

僕の場合、誰かに届けようと思って小説を書いているわけではなくて、一番辛かった頃の自分を救ってやりたいという思いが最大のモチベーションになっているんです。あのとときこういう言葉をかけてほしかったとか、こういうことをしてほしかったという願いを作品に込めている。僕は作品を通じて誰かに救われてほしいとか、感動してほしいとか、そういうふうにしたことはなくて、ただ、僕が僕自身を救おうとして書いたものを読んだ人が、間接的に、僕の知らないところで勝手に救われていたとすれば、それは素直にうれし



いことだなと思えます。

葛西 先生の小説の登場人物がかける言葉って、すごくこう、何だろ、真実味を持っているというか、ああ、こういう言葉をそのときかけてくれる人がいたら本当にいいなと思えるようなシーンが多くて。

三秋 はい。ただ、現実には、みんなの前にそういう人が現れてくれることはめったにないかもしれないんですけど。

葛西 そうですね。うんうん。

三秋 相当珍しいことではあるんですけど、ただ、そういうときの心の動きというものを厳密にシミュレートして、そういう心の動きを文章を通じてたどっていくうちに、自分の心の救い方がわかってくる…：そういう効能はあるのではないかと思いません。

葛西 うんうん、なるほど、そうか、そういうことですね。先生にしたら誰かを救おうと思つて書くと、ちょっと違つてきますね？

三秋 そうですね。逆に気負いすぎて、読者も自分も救えなくなるかもしれないですね（笑）。

三秋縫（みあき・すがる）

一九九〇年生まれ。岩手県出身。二〇一三年『スターティング・オーバー』でデビュー。主な著作に『三日間の幸福』『いたいいたい、とんでゆけ』『君が電話をかけていた場所』『僕が電話をかけていた場所』『恋する寄生虫』（いずれもKADOKAWA／メディアワークス文庫）『君の話』（早川書房）などがある。

葛西真記子（かさい・まきこ）

大阪大学大学院人間科学研究科博士課程（前期）修了（University of Missouri, Columbia カウンセリング心理学博士課程修了（PhD））。現在、鳴門教育大学大学院心理臨床コース教授、SAG徳島（徳島県のセクシユアル・マイノリティ活動団体）代表。臨床心理士・公認心理師。



装画 わたべめぐみ

巻頭対談 三秋 穂 × 葛西真記子 01

巻頭言 生ものとしての心理臨床 横山知行 10

Special Feature Articles

特集1

受験の心理学 責任編集：東畑開人 11

予備校から見た受験	中野良吾	12
誰かは頭が悪いから——受験と親子関係	東畑開人	14
受験と心理臨床：キャリア選択としての受験	沢崎真史	16
教育虐待	山崎孝明	18
学生相談室からみた受験	山中淑江	20

特集2

心理臨床のフィクションとリアル 責任編集：葛西真記子 25

スクールカウンセラーはどのように描かれてきたのか	寺崎真一郎	26
映画「英国王のスピーチ」	山口貴史	28
吉祥寺だけが住みたい街ですか？	内田 亮	30
傷ついた治療者と、それでも終われない臨床	松本聡子	32

心理臨床なう 責任編集：岩倉 拓 38

放課後等デイサービスと心理臨床	菅原英治	39
コミュニティ心理学からみた居場所「カドベヤで過ごす火曜日」	秋田恭子	40
福島のスクールカウンセラー	遠藤みち恵	41
サポチルという認定NPO法人——お金のない家の子どもに心理療法を届ける仕組み	松本拓真	42
市民ボランティアによる里親家庭で暮らす子どもへの支援——子どもと遊びプロジェクト	橋本愛美	43
司法裁判における専門家証人	生田倫子	44
老人ホームのカウンセリング	田所正典	45

Serial Articles

こころのリフレッシュ 私とプロレス	人見健太郎	22
先生たちの卒業論文——鏑幹八郎先生	内田 亮	24
心理臨床学会から 日本心理臨床学会「若手の会」活動紹介	鶴 光代	34
てんてん こころの広場に行く その7	細川昭々	36
WORLD MAP 「現代の米国の子どもの心理療法家」エイミー・ジョエルソン先生	池 志保	46
心理臨床家の養成 九州大学	大場信恵	48
立教大学大学院	林もも子	50
初心者のためのブックガイド 『対訳 ディキンソン詩集』	岡 昌之	52
『こころの処方箋』	森田健一	53
『心理療法がひらく未来——エビデンスにもとづく幸福改革』	松見淳子	54

臨床心理士資格審査の受験資格を取得することができる大学院／公認心理師養成機関の情報 55

成瀬先生の思い出 前田重治／村山正治／下山晴彦／亀口憲治 57

編集後記・事務局だより 葛西真記子・井村 修 62

巻頭言 生ものとしての心理臨床

新潟大学 横山知行

ある講習会でのこと。クライエントが「みんなから浮いているのがとても辛く、もう死んだほうが楽かなと思う。でも、この気持ちは秘密にしてほしい。信頼している先生だからやっとな話せた」とカウンセラーに語った際、どう対応するか検討するグループワークがありました。話し合いの中で、「まず、話してくれたことをねぎらう」「クライエントのしんどさに寄り添う」「死にたい気持ちの強さについてアセスメントし、その程度が強い場合は、できるだけ本人の理解を得て学校に伝える」という方向に話は纏まっていきました。

この話し合いや結論に問題があると言いたいわけではありません。こうした状況にどう対応するかの基本を確認しておくことは大切なことです。そうは思いつつも、私は、違和感を覚えていました。これが、どう対応・介入すべきか正答のある問題のように感じられたからです。けれども、このようなクライエントを目前にしたとき、例えば「話してくれてありがとう」と伝えることがいつも妥当だとは限らないでしょう。

面接において、とても大事なことは、セラピストとクライエントの関係性という軸のもと、「今の状況において、

クライエントがセラピストに、この話題を語るこの意味」を念頭に置きつつ、クライエントの語りを聴いていくことです。そして、座学や書物による学びだけではこれを実際に運用する能力は身につけません。しばしば身を削る思いをして、スーパービジョンを受けたり事例検討会で発表したりすることが心理臨床のトレーニングにおいて大切である所以です。

私の敬愛する作家、橋本治は「正義」について次のように書きました。

正解をいくら並べ立ててもしようがないのは、それが所詮「乾き物の正義」でしかないマニュアルだからで、そうならないためにも、人は時々「正義」についてを考えて、身をシェイプアップする必要があるのだと、私は思う。

「生物せいぶつの正義と乾き物の正義」（中央公論二〇一二年八月号）

この「正義」を「臨床に」読み替えたところに、心理臨床の実相があるのだと、私は思うのです。

受験の心理学

受験と心理学。

二つの言葉にはどこかみ合わない感じがあります。頭と心という二つの違った部分にかかわっているように見えるからでしょうか。

だけど、受験もまた心と深くかかわる出来事です。

そうですね、私たちの人生には何度か受験の時期があつて、そのとき心は受験に受かるか落ちるかにすっかりとらわれてしまいます。

早ければ幼稚園受験から始まり、小学校受験がある人もいれば、中学受験で初めて受験に出会う人もいますでしょう。高校受験はかなり多くの人が経験し、大学受験へとその道は続いていきます。人生には勝ったり負けたりがあるわけですが、受験はそれを強烈に体験するライフイベントです。

だから、そこには悲喜こもごもがあります。受験がよい思い出になる人もいれば、それが深刻にその後の人生に傷跡を残す人もいます。

そのとき、私たちの心に何が起きているのか、それが本特集のテーマです。現在受験生である人も、過去に受験生であった人も、そしてなにより家族が今受験をしているそのサポートをしている人も、自分の心を振り返りながら、本特集をお読みいただければ幸いです。

心理臨床学とはこういうことについてもしっかり考える学問なのです。



白金高輪カウンスリングルーム／十文字学園女子大学

東畑開人

予備校から見た受験

はじめに

我が国において、大学受験は社会の関心事のひとつです。二〇二一年から実施される大学入学共通テストにも注目が集まっています。毎年、大学入試センター試験が実施されるとマスコミは大きく取り上げます。筆者が約三〇年前に予備校生だった頃の印象的なエピソードとして、予備校のある有名講師が、共通一次試

創価大学教育学部

中野良吾

験（大学入試センター試験の前身）の直後の授業で、「大学に誰が入学しようとするか」という問題ではない。世の中にはもっと重要な社会問題があるのだから」と言いました。筆者は、「とんでもないことを言うな」と思った一方で、確かにそのとおりだとも思いました。この言葉によって受験一色だった視野が少し広がった感じがしました。また、「浪人させてもらっているのだ」と両親に対して感謝する気持ちになり、落

ち着いて国立大学の二次試験に向けて勉強することができました。当時の予備校生は、このように講師やスタッフに支えられていました。予備校には臨床心理士などの専門家はいませんでした。

予備校生のおかれている状態

本稿では、予備校には現役の高校生もいますが、「予備校生」とは「浪人」して予備校に通っている人のこととします。予備校生は、社会的に不安定な立場です。彼らは、受験を失敗したこと、同級生から一年は遅れるという挫折体験を抱え、さらに保護者に経済的負担をかけているという気持ちを抱え、厳しい受験勉強をする（しなければならない）というストレスがかかっています。予備校生は発達心理学では青年期に相当し、アイデンティティ(identity)の確立という課題に取り組み時期です。「自分とは？ 自分らしさとは？」という問いに対する答えを模索するのですが、予備校生は志望大学に合格しないとアイデンティティ

が確立できないと考える側面があり、それゆえの苦しさを抱えています。また、一人前の大人になるという「自立」の前段階として、経済的なこと以外の大学受験に関することは自己責任で行うという意味での「自律」がテーマとなります。大学受験では、将来へのある程度の見通しを持ち、進路選択する必要があります。つまり自分はどうなりたいたのか、どう生きていきたいのかと自己分析し、志望大学合格という自己実現を目標にして受験生活を送るのです。

予備校生の悩み

実際のカウンセリングでは、「勉強がはかどらない」「集中力がない」「よく眠れない」「理想的な受験生活とは？」「ケアレスミスをなくしたい」「実力と志望大学のレベルとのギャップ」「試験で緊張して実力が発揮できない」などの悩みを訴える予備校生が多く見られます。受験生だからしつかり頑張らなければならぬという焦りとそこから生じる不安が中心の問題です。また、この



ような受験勉強に関する訴えの背景には、親子関係、友人関係、異性関係などの問題があることも多いのです。

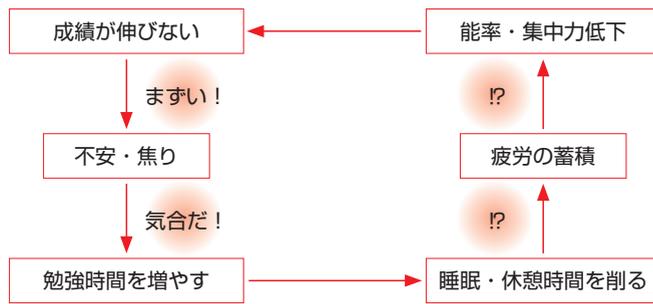
受験生症候群とは

受験生特有の心身疲労状態として「受験生症候群」というものがあり、受験生活を始めて禁欲的な努力家に変身し、疲れを自覚しただらない受験生に多く見られるものです。

受験生症候群のメカニズムは図の通りです。まず、成績低下や思うような成績が取れないと、不安や焦りから勉強時間を増やそうとして、睡眠や休憩の時間を削ります。このようにすると、当然疲労が蓄積しますが、予備校生は焦りのため疲労を自覚できず、結果として勉強の能率や集中力が低下します。そして、また成績低下につながり、悪循環が始まってしまいます。最後には、夜は眠気と戦っているだけで勉強が手につかず、勉強できなかつた罪悪感から睡眠の質が悪くなり、翌日の昼間は授業に集中できず、復習もおぼつ

かないという状態に陥るのです。この受験生症候群への対応は予備校におけるカウンセリングの大きなテーマです。

受験生症候群のメカニズム



予備校での心理臨床

臨床心理士などのカウンセラーを配置している予備校はそれほど多く

ないのが現状です。予備校での心理臨床の大きな特徴は、対応期間が四月中旬から翌年二月までであり、長くても一〇カ月程度と短いことです。主な活動内容は、①予備校生やその保護者への個別カウンセリング、②講演会などによる心理教育的・予防的活動、③予備校の講師やスタッフとの連携や研修、以上の三つがあります。

①の個別カウンセリングでは、「受験生症候群」への対応が重要で、「集中困難」「不眠・倦怠感などの身体症状」「抑うつ」が主な症状です。抑うつ程度の重い場合などは医療機関との連携も重要です。なお、カウンセリングでは、受験勉強をしている中で様々な問題が生じているという「文脈」を丁寧に扱うことが必要となります。

②の活動では、講演会は予備校生対象と保護者対象のものがああります。予備校生には、ストレスや受験生症候群への対処や試験でのあがり（緊張）への対処という内容が主になります。講演会を聞いてカウンセリングに繋がる予備校生も少なくありません。

せん。保護者には、予備校生の心理状態を理解していただき、基本的な生活習慣（睡眠時間の確保、食事のことなど）に配慮しつつ生活リズムを維持することや、予備校生の不安へのサポート方法という内容が主になります。保護者に対するサポートは年々必要になってくる印象です。最後に、③の活動の中で予備校のスタッフとの連携は特に重要です。筆者が関わっている予備校では、講義は講師が行い、日常的な進路の相談や生活上の指導は、クラスを担当しているスタッフ（学校の担任教員に相当します）が行っています。カウンセラーは週に一日程度の勤務です。予備校生へのサポートの際にこのスタッフから予備校生の日々の様子を聞いて対応と一緒に考えることも多いのです。

また、予備校在籍中に対応が最終するものばかりではなく、継続的な支援が必要な事例も多いため、入学先の大学の相談機関へつなぐことも重要な役割です。

誰かは頭が悪いから

— 受験と親子関係

白金高輪カウンセリングルーム／十文字学園女子大学

東畑開人

受験で傷ついた人

私のカウンセリングルームには、受験で傷ついた人たちがしばしばやってきます。

もちろん「受験の傷を癒したい」という理由でカウンセリングを申し込む人はいません。毎日過去の受験のことを思い出して悶々としている人はいない。そうではなくて、日々の落ち込みや、職場の人間関係、あるいはパートナーとの関係など、現在起きている切実な問題をなんとかしたくて彼らはカウンセリングにやってきます。

ただ、彼らの心に起きていることをよくよく調べていくと、そこに受験による傷つきが見つかります。

その受験は数年前のこともあれば、二〇年以上前のこともありすが、彼らがまだ大人になる前に体験したことが、心よからぬものを残してしまつたようなのです。

徒競走で傷つくのか？

誰しも第一志望の学校に落ちてしまつたら傷つきます。何事もそうですが、一生懸命努力をして、うまくいかなかったら傷つく。当たり前のこと、むしろそうやってきちんと落ち込めるのは、健康なことです。

ただ、普通はそのような傷は回復していきます。たとえば、第四志望の学校に進学して、そこで親友ができたなら、その学校にきてよかつたと思うでしょうし、自分の努力が

足りなくて不合格だったと思いが至ると、次は頑張ろうと前向きに思えるかもしれないけど、時間はかかるかもしれないけど、私たちの心には現実を受け入れて、回復していく力があります。

ですから、「受験地獄」と言つたりもするけど、受験自体が悪魔的なイベントではないと思うのです。それは就活や恋愛、出世争い、そして運動会の徒競走と同じで、人生で何度も繰り返される「競争」の一つにすぎません。私たちの人生は、それに勝つたり負けたりしながら進んでいきます。そうやって、自分だけの物語が紡がれていく。

にもかかわらず、受験が生傷として残り続けている人たちがいます。しかも、そこには、受験に落ちてしまつた人だけではなく、第一志望に合格し続けてきた人も含まれます。その傷は競争に負けたことで生じたのではなく、競争に参加したこと自体で生じたようなのです。

ふしぎなことです。徒競走の勝ち負けがその後の人生に深刻な影響を及ぼすとするなら、それはただの徒

競走ではありません。何かがそこに付け加わっているのです。

受験で傷ついた人たちは、本当のところ、何によって傷つけられたのでしょうか？

生々しい親子の物語

カウンセリングで受験の傷つきが語られたとき、私は次のように尋ねます。

「受験で落ちるのはつらいことだけど、実はそれはみんなに起きることで、みんなはそれでもそこから回復していくわけだけど、なぜあなたにはそれが難しかったのだろう？」

この問いを受けて、彼らが語り始めるのは、親子の物語です。

たとえば、ある父親は子どもが模擬試験で悪い点をとると「誰が塾代を出していると思っているんだ」と罵り、土下座させました。ある母親は受験の失敗を機に、まるでその子が家からいなくなつたかのように心を失いました。またある人は、成績の悪い兄が「あいつには生きていく意味がない」と親に邪険にされる

中、成績の良い自分だけではなんでも物を買ってもらえたと語っています（これもまた傷つくのです）。

無限に語られるこれらの物語の特徴は生々しさです。ここでは、親子の間に本来引かれているべき境界線を踏み越えて、親の強烈で生々しい感情が子どもに注がれています。

期待、愛情、失望、怒り。感情は様々ですが、普通だったら人間相手に直接ぶつけることを躊躇するような言動が、飛び交ってしまいます。

そう、受験というありふれた競争が心に傷跡を残してしまうのは、そこに親の生々しい感情のつかってしまふからです。

頭の悪い人には価値がない

ならば、そのとき、飛び交っているものとは何か？

私はそれを「頭の悪い人には価値がない」という考えだと思っています。このとき、二つのパターンがあります。

一つは子ども自身が「自分は頭が悪いので価値がない」という考えを

持ち、自分を責めることです。これは受験の失敗からしばしば起こるパターンで、自尊心を深く傷つけます。もう一つは「自分は頭が良いけど、

頭が悪い人には価値がない」という考えです。姫野カオルコ氏の『彼女は頭が悪いから』（文藝春秋、二〇一八年）という小説では、東大生が偏差値の低い女子大の学生を軽蔑して、モノ扱いするシーンが描かれています。ここには、受験の成功によ

って、他者と普通に付き合うことができなくなった姿を見て取れます。そして、そういう人は、自分が「頭の悪い人」になることをいつも恐れることになります。それもまた受験

による傷つきと言えるでしょう。それらはいずれも痛ましいものですが、忘れてはならないのは、そういう考えを子どもに注ぐのが親であることです。

ここにも二つのパターンがあります。一つは親自身が自分を「頭が悪い」と傷ついている場合です。その自分に向けられている攻撃性が、受験を機に子どもに向かいます。逆に親自身が自分を頭が良いと思うがゆ

えに、「頭の悪い人は価値がない」と思っている場合もある。そのとき、子どもは頭が悪いと見られた途端に、価値のない人として扱われてしまう。

様々なパターンがあるのだけど、誰かが「頭の悪い人」になってしまいうことが、子どもの心に痕跡を残すのです。

親も傷ついている

このように書くとき、「親が悪い」と私が主張しているように見えるかもしれませんが、話はそうシンプルではありません。

というのも、よく考えてみれば、親自身も「頭の悪い人」という考えに傷ついているからです。だからこそ、子どもの受験をめぐる、普段の彼らならきちんと制御できるはずの生々しい感情がむき出しになってしまふ。

このとき、親たちを傷つけているのは何か？ それは私たちの社会ではないか？

私たちの社会では学歴が収入や社会的地位に影響を与えます。そして

「頭の良さ」が能力の高さとして称賛されています。足の速い遅いと違って、「頭の良し悪し」は、この社会ではきわめて重視されている。そして、親自身も、そういう社会で日々勝ったり負けたりして、傷ついている。

運動会の徒競走は遊びにすぎないけれど、子どもの受験は親自身が生きている社会の厳しい現実とつながっています。だから、子どもの受験に直面すると、親も冷静ではいられなくなってしまうのです。自分でも言いたくないことを言ってしまう、やりたくないことをやってしまう。

しかし、本当のところ、社会は多様です。そこには様々な生き方があり、様々な幸福の形がある。頭の良し悪しという定規以外にも、様々な価値があります。だけど、傷ついていると、人は一つの定規しか見えなくなってしまう。

親も子ども一つの定規しか見えなくなったり、受験は悲劇になります。だから、実はそこに複数の定規があることを話し合う。それが私たちカウンセラーの仕事です。



受験と心理臨床… キャリア選択としての受験

聖徳大学児童学部

沢崎真史

大学入試制度の混乱

最近の大学入試制度の混乱は高校生に大きな波紋を及ぼしています。センター入試から新制度入試への変更、英語入試の変更と直前の突然の中止、AO入試制度の変更など受験を準備する側にとっては大変な混乱に巻き込まれています。しかし、どんなに入試制度が混乱しようと、高校生はその混乱を乗り越えて大学進学を目指しているのが現状です。それは高校生だけではなく、多くの中学受験や高校受験を目指す小中学生も、将来よりよい環境で学び、よりよい就職の切符を手に入れるために受験の渦中におかれています。よい就職とは何か。その進路選択のための価値観の基準は、それが自分のや

りたい仕事なのか、自分の興味関心にあった仕事なのか、能力に合った就職なのかなど様々ですが、中学から高校、大学へと学びの段階を進めるにあたって、エスカレーター式に進学できる学校を除けば、多くの場合受験という壁を乗り越えなければなりません。

日本の受験制度 — 中学から高校へ —

日本において、高校への進学率は九七％に達しています。そして、その高校の八割が普通科です。古くから工業科や商業科等の職業科もありますが、理数科や国際科のような専門領域に特化した学科や単位制の高校も増加しています。高校受験に際しては、学科の学びの特徴を検討する場合があるとしても、将来の進路

の検討までは十分になされていません。高校選択の基準は偏差値偏重と言っても過言ではないでしょう。

海外では、初等教育の段階で将来の職業を見据えて職業学校への進学か、大学等の高等教育への進学への道に繋がる中等学校への進学を真剣に考え、選択がせまられる制度が残っていますが、日本ではどの高校からでも、全ての大学の学部に進学できる道が開かれています。これは素晴らしい制度です。まだ十分に将来の進路選択に検討する力が育っていない状態で、進路の選択肢が狭められていないことは、余裕をもって進路選択に臨めるという良さがあります。しかし、その反面で高校受験の段階では、将来展望はまだほとんどできていないのです。

大学に進学するということ — 高校から大学へ —

高校卒業後、短大・大学等高等教育機関へ進学する人は、五〇％を超えています（文部科学省、二〇一八）。ベネッセ教育総合研究所の大学生を対象とした調査（二〇一七）によ

れば、進路選択の時期について、〈文系理系を意識した時期〉〈大学の専攻分野を意識した時期〉〈大学選択の時期〉〈職業選択の時期〉について分類した結果、二つのパターンが見出されています。一つは教育学系（男女共通）や女子の医歯薬看護学系統でみられたパターンで、〈文系理系〉→〈職業〉→〈専攻分野〉→〈進学する大学〉です。比較的最早い段階で具体的な職業イメージからその職業に必要な能力や適性をどのように身に付けるかを考えています。もう一つは、人文科学や社会科学、理工学系統の男女及び医歯薬看護系の男子で、〈文系理系〉→〈専攻分野〉→〈進学する大学〉→〈職業〉です。こちらは選択時期が遅く、ゆつくり時間をかけて検討していることが特徴であると報告されています。このことから、比較的工作の内容がイメージしやすい教育学系統や医歯薬看護系の場合は、職業選択が先であり、大学での専攻分野も免許や資格などとの関連で早い段階で明確になるでしょう。

医師になりたければ、必ず医学部



に進学しなければ医師にはなれませんが、幼稚園の教員になりたければ、幼稚園教員資格を取得できる課程のある養成大学に進学しなければ幼稚園教諭にはなれません。受験の段階で、資格取得を目指す進路を選択する場合には、必ず資格取得が可能かどうかを確認する必要があります。しかし、特に資格取得を目指さない就職、いわゆる一般の企業就職を考える場合は、特に進学する学部は問われません。前述のように、一般の企業の場合には、何を専攻したかということよりも、大学段階でどのような力を育成し、社会でどのように生かすかが問われます。すなわち、専門的な知識だけではなく、大学時代における様々の経験の蓄積として身に着けた力が問われるのです。

学びの学校段階から 労働の社会人段階への移行

一九八〇年代以降、日本におけるキャリア教育が盛んになった背景には、若年者の早期離職などが問題になりましたが、複雑になった労働社会の問題や高等教育進学における学

力偏重の中で、学校段階で培ってきた能力や興味関心をどのように社会人段階へ移行させるかが課題になっています。

日本の教育段階では、キャリア形成についての学習機会が以前に比べて増えてはきたものの、まだまだ少なく、実際に役立っているかも検証されていません。本来「キャリアとは、人が生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出していく連なりや積み重ね」ととらえるとすれば、単に労働する者としての役割だけがキャリア教育の目指す目標ではなく、スーパー（一九九五）の提唱する、子どもの役割、親の役割、学習者の役割、労働者の役割、市民の役割、家庭人としての役割をどのように生きるかを総合的に考える必要があります。その意味で「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」を「キャリア発達」として、自分らしい生き方をするための模索をする機会を考える必要があります。長い年月をかけて積み重ねる力や能力を、

自らの生き方として仕事と社会の役割の中で貢献することこそがキャリア形成なのです。

大学段階は自分に向かい合える重要な時間であり、それが青年期の発達課題です。その意味でも、現代社会における大学受験は、彼らが自分の力を伸ばす場を手に入れる大事な挑戦であると言えるでしょう。

受験における心理臨床家の役割

学校段階における心理臨床は、教育相談や学生相談の形で展開されています。その援助の視点は思春期・青年期において直面する課題の解決に向けられています。学習上の問題も含めて、親子関係や親から自立の問題、自尊感情、友人との関係から見える自分の弱みなどの問題の解決に向けての援助を考えています。その相談は、進路や進学に関する相談と別に考えられることが多く、心の相談は心理臨床家に相談し、進路や受験に関することは進路指導担当者に相談することが多いです。しかし、学校段階で発達課題として

直面する問題や状況は、将来社会の中でどのように生きていくかという将来のキャリア・プランニングと密接に関係していることを注目しておきたいと思います。したがって、心理臨床的援助の担当者であるスクールカウンセラーも、それぞれの学校段階からの受験が成長のために必要な挑戦であり、その時に抱えている問題解決とともに将来へ向けてキャリア支援の視点も重要であると言えるでしょう。

日本の受験において、その選択の広さはキャリア選択の視点からみると、キャリア探索の余地が残されているメリットと、キャリア選択の先延ばしが起こっているデメリットがあるかもしれません。その意味でも進路選択に揺れ動く児童生徒たちへの心理臨床家の果たす役割は大きいと言えます。

教育虐待

こども・思春期メンタルクリニック

山崎孝明

「東大以外は大学ではない」。みなさんも、ドラマや漫画の中でそうしたセリフを聞いたことがあるのではないのでしょうか。都内のいわゆる進学校でスクールカウンセラーをしていると、本当にこの「セリフ」が親御さんの口から発せられることがままあります。「東大以外は大学ではない」は、戯画化された世界の中でできごとではないのです。

「教育虐待」とは

こどもが亡くなる事件が断続的に発生していることもあり、児童虐待は近年広く認知され、防止が謳われています。そうした事件は貧困層家庭で起こることが多く、児童虐待は貧困と結びつけて考えられがちです。

これに対し、むしろ裕福な家庭で起こりがちな「虐待」として「教育虐待」が昨今耳目を集めています。

教育虐待の特徴は、わかりやすく「悪」だと感じられる通常の虐待と比べて、それが「悪」なのかどうかの線引きがあいまいでわかりづらいことです。

親は「あなたのため」と思って教育を始めます。周囲からもそう見えます。でも、どこからか一線を越えてしまう。そして、その一線はどこにあるかわからない。教育虐待の内実は、そういったものです。

「教育虐待」には、はっきりとした定義はありません。一般的には「こどもの人権を無視するような行き過ぎた教育」といった意味合いで使われています。そうした行為は以前か

ら存在はしていました。が、それにいま焦点が当たっているのはなぜなのでしょうか。

先行き不安と教育の低年齢化

一因として、教育の低年齢化をあげることができるでしょう。ネットで「早期教育」を調べてみると、予想外に「よい効果を生まない」という記事ばかりヒットするのに驚きました。というのも、臨床をしていると、早くから教育しなければという親御さんにお会いすることがとても多いからです。「そうした考えは間違っている」と断じるのは簡単ですが、ここではなぜそういうことが起こるかを考えてみることにします。

最大の要因は、将来への不安でしょう。日本の未来が明るくないことは誰もがわかっていることです。今後日本では、高齢者の割合が増加し、こどもの数が減っていきます。すると若年層にかかる負担は必然的に大きくなります。にもかかわらず、毎月大量に持っていかれる年金は自分が支給される側になった時にはそ

も制度が存続しているかも怪しい。そんな未来が予想されるなら、わが子には学歴をつけて一生安泰な生活を送れることを保証してあげたい。そう思う気持ちもわかるような気がします。

そう思うだけでなく、その思いを実行に移すことを可能にする条件が、一人っ子の増加です。よくも悪くも、こどもに対しての注意や金銭が集中する環境が整っているわけです。

中学受験の大衆化

こうした時代の変化がもつとも表れているのが中学受験でしょう。首都圏では中学受験はかなり一般的になってきています。二〇〇七年にはついに五人に一人が中学受験をするようになりました。ここにも、親の不安が反映されていることが見てとれます。「ここに入れば安心」という手形をはやく切ってもらいたい、そして安心したい、そのためには進学実績のよい中高一貫校に入りたい、と。

「中学受験は親の受験」。中学受験

におけるこどもの成績は、親のサポートの質によって決まるのだ、という意味のことばだそうです。もちろん実際にはそんな単純な話ではないのですが、このフレーズが広まっているところからして、一部ではそう信じられているのでしょう。しかし、この考えが親を焦らせます。もしこれが正しいのであれば、こどもの失敗は自分が親としてやるべきことを十分に果たしていなかったからだ、と感じられてしまうからです。

しかし実際には、残念ながら、人には固有の知能があります。勉強で伸びる部分とそうでない部分があります。「勉強」を「努力」と置き換えてもいいかもしれません。こうした言説は、いつけん差別的なものに聞こえるかもしれません。しかし、やはりそれは事実ですし、否認するわけにはいきません。固有の限界を無視することこそが、教育虐待に繋がるからです。

「大学受験も親の受験」？

小学一年生から六年間の塾通いを

し、最後の三か月は毎朝五時に父親に起こされ、つきつきりで受験校の過去問をのべ五〇年分解かされる――。そういった極限を超えた勉強の末に、第一志望に滑り込んで合格したとして、どうなるか。授業は伸びしろをたくさん持つている子を基準に作られるわけですから、入学前にもう限界まで伸ばされて今にも切れそうな子が、適応が難しいことは想像に難くありません。

中学受験が終わったのも束の間、息つく暇もなく、今度は大学受験に向けての六年間が始まります。彼らには休みなどありません。最初の中間試験で赤点など取ろうものならたいへんです。「教育は投資なのだから、見合った成果を見せろ」。そうしたこととともに、部活は強制的に退部させられ、これまで以上に勉強が課せられます。怠けているのではなく、溺れかけているだけなのにだから、成績は上がらない。余計に圧力は強くなる。

進学校の生徒たちの学力は概ね高い水準にあります。その知力ゆえ、目立った形で不適応を起こす子はそ

う多くありません。すると、スクールカウンセラーを利用するのは親御さんが多くなります。とにかく多い相談は「成績が悪い(勉強しない)」と「ゲーム依存」です。そうした相談が続くと、まるで異常をきたした機械を修理してくれと言われているような気持ちになることもあります。

その裏には、いろんな事情があります。一昔前は、中学受験と云うと「お金持ちの家のイベント」というイメージがあったかもしれませんが。最近はそのでもないのです。自分たちがしているような苦勞をこどもにさせないよう、よい中学、よい大学に行き、高収入を得る、というコースに乗せることで、こどもの未来の安定を保証してあげたいという気持ちから、共働きで稼いだお金でなんとか私立進学校に通わせている、という家庭も少なくありません。

せっかく乗れたそのルールになんとか戻してあげたい。戻れば、幸せが保証されているのだから――。そうした親の気持ちも、「間違っている」と一蹴することができるでしょうか。

こうなると、「大学受験も親の受験」、もつと言えば「こどもの未来は親の責任」と感じられているのかもしれない、と言ってよいのかもしれません。親が追い詰められている、ということですから。そうした社会のひずみを考えないわけにはいきません。

では、どうしたら？

親は「あなたのため」を思って、こどもの幸せを願って、こどもに勉強させる。でも、それが本当に「あなたのため」になるのか。それは、こどもにはわからない。親にもわからない。本当は、誰にもわからない。万人に共通する「正解」はこの世に存在しません。私たちは、自分で自分の「答え」を選択していくしかないのです。「正解」を教えてください。誰かを探すのではなく、話を聞いてくれる誰かと話すこと。その中で視野を広げること、そして自分が何を考え感じているのかを掴むこと。それが、「答え」を探す際に必要なことなのです。



学生相談室からみた受験

大学、短期大学や高等専門学校などには、学生の生活や学業についての相談を受け付ける機関が、学生相談室や相談所またはカウンセリングセンターなどの名前で設置されています。高校まではクラスや学年に担任の先生がいて、生活指導や進路指導の機会が設定されていますが、大学では困ったことや誰かに聴いてほしいことがあれば、自分で相談室に相談に行きます。ここではそのような学生相談室に寄せられた相談ごと

立教大学学生相談所

山中淑江

から受験についてのテーマを取り上げます。ですから、第一志望であったかそうでなかったかはあれども、大学受験に合格して入学しているひとたちについての話です。

価値観の変化

うちの子どもが予備校で、行きたいと思う大学より難易度ランクが一つ上の大学を第一志望にするように指導されました。上を目指してやっ

と一つ下のランクの大学に合格するというわけです。なるほど、だから第一志望でない学生がこんなにいるのかと納得しました。おそらくはトップクラスの教校以外は、第一志望はもっと難しい〇〇大学だったという学生だらけでしょう。ここで一つの教訓です。「大学に入ったら、その大学に合格したこともその上の大学を目指していたことも、何の自慢にもならない」。周りのひととみんな同じだからです。

ひとの考えや価値観は、周囲の影響を受けます。中学生や高校生は、家族や親せき、学校の友人や教師、塾の講師などから進路や受験について直接の情報もたらされ、知らず知らずにうちに同様の考えや価値観を持ちやすいものです。そして、入試の直後はその価値観に基づいて受験に成功したとか失敗したとか評価をします。ところが大学に入学すると、それまでとは異なる価値観に触れる機会があり、何より周囲にいるのは同じ大学の友人たちとなり、価値観も変わります。「ここは自分にふさわしくない」と思い続けること

はむずかしくなるでしょう。

仮面浪人のその後

四月から五月にかけて、この大学に入学したのは不本意で、来年もう一度受験をするという学生が相談にきます。いわゆる仮面浪人です。しかしそのほとんどは夏休みが近づくころには、大学での生活が楽しくなり、「このままでもいいや」と思うようになります。

もしもこのままこの大学で過ごすことになったら、友だちがいないと困るだろうと、友だちを作ればその集団になじんでいくのは自然なことです。最低限の単位はとっておこうと授業に出ているうちに、勉強が面白くなるかもしれません。一応入っておいたサークル活動が楽しくなってくるかもしれません。積極的に参加して楽しもうとするならば、さまざまな楽しみが見つかるのが大学です。「もしものために一応」のつもりが、自分の居場所が見つかり、毎日が楽しく充実してきて、再受験はどうでもよくなる仮面浪人は少なく

ありません。

受験は、それ以前には大きな分岐点のように見えますが、通過した後振り返れば一本の道でしかないのです。ひとはいつも自分がいる地点から過去を評価します。今いる場所に満足していれば、そこに至る過去のあれこれは「あれはあれでよかったのだ」と思えます。逆に現在の境遇や自分自身に不満があれば、「こんなはずではなかったのに、何がいけなかったのか」と考えます。



保険は有効か？

仮面浪人の誤算はもう一つあります。ひと昔前、おそらく今の受験生の親世代が学生であった頃に比べて、大学で単位を取得することは難しくなっています。授業に出席し、提出物の期限を守り、ディスカッションや共同作業をして、試験で一定の成績をとらなければなりません。受験勉強の傍らにこなせるものではありません。本当に再受験する人は入学直後あるいは前期が終わったら休学して受験体制に入ります。入学だけ担保しておこうという考えでしょう。「もしも再受験で合格しなかった時にも四年で卒業できる保険をかけておこう」という考えは、あまり現実的ではありません。

大学生活で何を学ぶか

そしてそのどちらでもなく、不本意だったと言いつけるひともいます。大学や他の学生の不満を言い続け、自分を受験に追いやった親や誰かを

恨み、後悔の中に居続けます。彼らは大学に登校しなくなり、かといって受験勉強をするでもなく、そのままずると日を過ごし、場合によっては何年もその状態を続けたのちに学生相談に現れます。

彼らは仮面浪人のはずが楽しくなってしまう人たちとは逆で、大学になじめなかったり、友だちができなかったり、居場所が見つからなかったりしていました。そして多くの場合に、そのような周囲とのなじめなさは大学で初めて生じたわけではなく、中学や高校、あるいは家族の中でも感じられていたことが相談の中でわかってきます。

過去にそういう体験をしてきた人もいるでしょう。そうであったとしても、大学は、ひとと一緒に行ってもひとりでもよい、科目もある程度の選択が可能だし、必要な単位をとりさえすれば、あとは関心のあることに多くの時間を使える自由度の高い場所です。自分は何が好きか、どう人と付き合うか、どのようなあり方や環境が楽なのか、それらを試す機会があります。元々自分に向い



ていないことに「できなければいけない」と固執するのは効果が少ないばかりでなく、自信を持っていないことにつながります。大学の後はより多様な社会に出ていきます。大学生活という時間の中で、どこでどのように生きていくのが自分に合っているのかを知ることがその後の幸せな人生につながります。学生相談はそのようなことを考えるお手伝いをします。

私とプロレス

はじめに

聞くところによると、この「ころのリフレッシュ」は本誌において久々の復活だそうです。今回は、「心理臨床家はどうなことをしてリフレッシュしているの?」というクイズや学生さんからのよくある質問に、何らかの答えを返せたらという趣旨です。臨床現場では専門家の自己開示という微妙で複雑な問題も絡んで直接的に示す機会はあまりないかもしれません。私にとっても少しチャレンジングな課題なのですが、思い切って書いてみることにします。私の場合は、「プロレス」

についてのお話です。

プロレスは「やらせ」など様々な意見がありますが、本稿においては「プロレスは一種のアートである」と私なりに定義をしておきます。プロレスは相手に大怪我をさせてはならず、対戦相手の鍛えているところに技をかけたり、相手の技をしつかり受けたりすることも大切なので、勝つことが最終的な目的の格闘技とは違いがあります。とはいえ、しっかりとトレーニングをしなければ誰でもできるようなものではなく、真剣さは格闘技のそれと変わらないと思います。そして、この真剣さと日々

みとカウンセリングルームどんぐり 人見健太郎

の鍛錬の重要性は心理臨床実践においても私は全く同じだと考えます。

プロレスの魅力

私が小学生の頃、男の子たちの間ではプロレスが大ブームでした。今では「プ女子」という言葉があるように女性ファンも多いようです。

少年時代の私にとってのプロレスは、「強い男への憧れ」とでも言えるものでした。自分にできないことをしている選手たちへの憧れは、同一化と呼ぶにふさわしく、観戦中は自分も選手になり切ったように入れ込んで応援していたと思います。当

時のプロレスには今よりも明確に正統派と悪役がいて、感情移入しやすい設定も魅力だったのでしよう。自分の攻撃性の発散もしていたのでしようし、選手の個性から「取り入れ」もしていたのでしよう。

さて、紙幅の都合があり、一気に私が臨床家になった時代まで話を飛ばします。私は少年時代とは異なり、「受けの美学」というプロレスに独特なものへの興味が大きくなりました。プロレスラーは「バンブ（受け身）」を取ったことがない奴に何が分かる」とプロレスへの懐疑的な意見や評論家気取りの人に対して表現することが多いのですが、「受身」とは心理臨床の神髄でもあります。

私たち心理臨床家も「ただ話を聴いているだけではないの?」「甘やかしているだけではないの?」「言われることがありますが、「受身で話を聴くことの難しさの何が分かる?」と私は言いたくなります。私たちは真剣な話し合いの中で様々な気持ちを抱きつつも、まずは「受ける」のだと思います。そして、怪我をさせない＝傷つけない配慮をして発言をし

ます。それに対して、またクライエントが何かの発言という技を掛けてきます。私たちも怪我をしないでしつかりそれらを受け止める必要があります。専門家が傷ついて再起不能になつてはクライエントも傷つきま

す。プロレスで言えば観客に当たる存在が、私たちにとつてはクライエントの家族や世の中の人たちかもしれないませんが、怪我ばかりしている専門家が增えたら、そのカウンセリングという試合は不評なものになるでしょう。適切なコミュニケーションのやり取りが重要だという点で両者は全く一致します。

こう考えると、プロレスラーの個性や背景にも興味が出てきます。相手のレスラーに腰が引けている選手

の技は迫力がありません。私はどうだろうかと内面的なことにまで考えが及びます。相談室には基本的に自分とクライエントしかいませんから、専門家には自分の内的イメージ

による支えも大事です。専門家が訓練セラピーなどを受けて、その内的イメージの意味も吟味できていると

物語としてのプロレス

—その虚と実…そして人生

更に研ぎ澄まされた感性として利用できるのではないかと思います。私個人は「自分の中のプロレスラーの部分」を大事にしていると云えます。もはや趣味と実益を兼ねており、単なる攻撃衝動の発散よりもずっと深みのある趣味になつたようです。

別な側面は、プロレスの物語性です。これを伝えるためには、プロレスを観るきっかけになつた長州力選手について書かなくてはなりません。今ではバラエティなどにも出演してお笑い芸人が滑舌悪く「キレてないですよ」と物まねしているのを笑顔で見ている人という印象もあるかもしれませんが、一九八〇年代は紛れもなくプロレス界のスーパースターでした。しかし、根っからの正義のヒーローとは少し違っていました。当時のプロレスにはある種の序列や「格」が重んじられる風潮がありました。長州選手はそれを破った人です。アマレスでオリンピックに

出場したエリートとしてプロレス界に入門したものの、人気が出ずに低迷していた時代が一〇年近くあったそうです。ところが、一九八二年に格上の選手に突如「仲間割れ」という形で反発したのです。ここで年功序列に悩む人たちや学校で自分らしくいられない子どもたちを中心に爆発的な人気が出ることになりました。

田崎(二〇一五)はノンフィクション作家の立場で、「これは既に誰かがストーリーを作っていたのではな

いか?」という類の質問をしています。長州選手は明確には答えていません。しかし、団体の長から「このままでいいのか?」と刺激されたことは認めています。全て作られたというわけではなく、長州選手のどこまでやったらいいのかという悩みや考えがその「仲間割れ」に含まれているのが真相のようです。

自分を作る時期にいた私は、この長州選手の物語に魅かれていったのでしよう。私が臨床家になつた年に長州選手は一度引退し、私が英国留学を控えてナーバスになっていた時に現役復帰しました。これだけでも

勝手に自分の人生と関係を持たせて想像していくような面があります。

二〇一九年に長州選手は二度目の引退をしました。私は長い思春期を終え、大人として私の物語を自分で作ることが要求されているようです。

おわりに

心理臨床家もクライエントも、自分の物語の主人公です。物語をうまく作れなかったり、壊されてしまった人たちの物語作りをお手伝いする仕事は心理臨床と言えるかもしれません。そのようなことを考えながら、次は本誌で長州選手と対談できたらと勝手な思いを抱きながら筆を置くことにします。

● 文献
田崎健太(二〇一五)『真説・長州力』集英社インターナショナル



心理臨床の先達の卒業論文はいったいどんなテーマで書かれたのか？ そしてそのテーマはそれからの臨床活動とどうつながっているのか？ 今回は、長く日本の精神分析的臨床を牽引されてこられた鑪幹八郎先生にお話を伺った。

●なぜ結果が出ないのか？

心理学を学んだ後は小学校教師になるつもりだった。元来子どもが好きだったが、大学では主に実験系の心理学研究が行われていた。思索した末、鑪は発達心理学のウェルナーを参考にしながら、知的障害児の知覚についての実験を行うことにした。外傷性（出産時の外傷や妊娠中の薬剤の影響などによる）知的障害と内因性（より遺伝負因の強いと思われる）知的障害とで、障害児の視覚的情報

の受け取り方が違うのではないかという仮説を立て、実験を行った。

実験は被験者集めから難航した。まず戦争孤児を保護する施設に泊まり込み、一人ずつ知能検査を行うところから始めたという。刺激である画像を提示するタキストスコープ（瞬間露出器）も手に入らなかった。刺激画像は、うちわを仰ぐように手で素早く提示するしかなかった。それでも施設では歓待され、なついてくる子どもたちがうれしかったという。

しかし結果は出なかった。二つのグループに差は見られなかったのだ。差はないという結論で卒業論文を提出した。提出したものの、鑪は納得できなかった。ウェルナーの先行研究では、二つのグループに差があることが示されていた。

ではなぜ結果が出ないのか？ グループ分けが正確ではなかったせいなのか、実験器具の問題か、はたまたま本当にそこには差がないのか、疑問が残った。もう一回実験をしてはつきりさせたい、その思いがどうしても抑えられず、鑪は教師になるのをやめ、京都大学大学院へ進んだ。大学院では、先輩の協力のもと慎重に被験者を選びグループ分けした。念願のタキストスコープは研究室の助手が精巧なものをわざわざ作成してくれたという。

そして満を持してのリトライ、今度こそと思った。

しかしやはり差は出なかった。「苦勞が水の泡だ」と落ち込んだ鑪だったが、「心理学の研究は仮説通りにならないのがすごく大事。結果が出なかったということを証明できたことに意味がある」という教授の言葉に救われたと感じた。

●卒業論文に助けられ

実験からスタートした鑪の研究生活だったが、子どもについての興味は薄れず、プレイセラピーを通して徐々に臨床への興味が膨らんでいった。今でいう不登校の問題との格闘の末、米国のホワイト精神分析研究所へ留学、精神分析について訓練を受けた。言葉の壁と留学資金の問題で、大変な三年間だったという。しかしそんな苦難の留学生活を経て帰国する鑪を助けたのは、失敗に終わったと思っていた卒業論文だった。

帰国後の勤務先を探していた鑪に、知的障害児を指導する教員の養成を進めていた大阪教育大学から声がかかったのだ。結局、卒業論文における障害児研究の経験が決め手となり、鑪は大阪で教鞭を執ることにした。この時ほど卒業論文に助けられたと感じたことはなかったとい

う。

●影響はその後

インタビュ어의三日後、鑪先生からメールを頂いた。自身がE・エリクソンの著作を翻訳した際、「epigenetic development」を「個体発達分化」と訳したが、それを「H・ウェルナーの考えと紛らわしい」と批判されたことがあったのを思い出されたそうだった。卒業論文で参考にした発達心理学のウェルナーの影響が、その後の精神分析的な仕事の中に見出されていたこと、そしてそれを忘れていたことに自分自身驚いたという。卒業論文の経験は鑪先生の中に思っていたよりも深く息づいているようだった。

鑪幹八郎（たたら・みきはちろう）

一九五七年熊本大学教育学部卒業。京都大学大学院博士課程修了。教育学博士。ホワイト精神分析研究所で精神分析の訓練を受け、A・リッグスセンターではエリクソンの下、研究に従事。二〇一五年瑞宝中綬章受勲。

心理臨床の フィクションとリアル

いつの時代も、いかなる場所でも人々は悩んできた。
そんなときどうしてきたのだろう。
神に祈ったり、村の長老に相談したり、様々な占いを試したり。
数多くの解決策が模索されてきたのかもしれない。
現代はどうだろう。
心を扱う心理臨床が生まれ、
心の専門家であるセラピスト・カウンセラーという職業が生まれ、
多くの人が助けを求めるようになった。
では、心の専門家はどのようなかわりをしているのか。
また、心の専門家はどのように悩みを解決しているのか。
あるいは、心の悩みを解決しているのは、心の専門家だけなのか。
このような問いへの答えをフィクションの中に見出し、
実際の心理臨床をそこから考えてみようというのが
今回の特集テーマ「心理臨床のフィクションとリアル」である。

鳴門教育大学大学院 葛西真記子

スクールカウンセラーは どのようなに 描かれてきたのか

子どもの心の相談室がじゅまる

寺崎真一郎

教育現場での代表的な心理士の職種として、スクールカウンセラー（以下SC）が挙げられるだろう。

今回は、SCが映画やドラマの中でどのように描かれていたのか、そしてそれがどう変わってきているのかということについて、映画『あの空をおぼえてる』（富樫森監督、二〇〇八年）とテレビドラマ『明日の約束』（二〇一七年）を比較しながら述べていきたい。

映画『あの空をおぼえてる』では小日向文世さんが小学校のSC役を演じている。物語は家族をテーマに、幼い兄妹が交通事故に遭い妹だけが

亡くなってしまった現実を、家族一人一人がその痛みを受け止めていくまでの軌跡を描いたものである。一〇歳の兄、英治が通う小学校に勤務するSCは普段からカツラをつけていて、退院して小学校に戻ってきた兄の様子を担任教師と傍で見守るところからコミカルに描かれている。まるで事故のことなどなかったかのように振舞っていた兄だったが、ある国語の授業中に妹のことを思い出し、教室から飛び出してしまふ。一人で佇む兄の傍に、SCの小日向文世さんがひよこっとな隣に座るのだ。「どこの国の真似をしているかわか



らないけど、近頃はなんでもカウンセラーだ。まあ俺はそのおかげで飯を食っているんだけどな」と軽妙に話しかける。一方的に話しかけるSCに対して、兄は「放っておいてくれますか？」と突き放すのだが、SCは「そりゃそうだよな、どうせ話を聞いたって俺がやってやれることなんて、何一つもない」と言い、つけていたカツラを外す。カツラをつけていた理由を「自分の娘がお願いしたからだ」とSCは話すが、それは当時のSCがまだ学校という組織の中でまだ認知されず、見た目（SCが学校の中で機能するかどうか）に問わず、溶け込むこと）が最優先されていたことを物語っているようにも思える。そして、映画の中でSCが話を聴くのは相談室ではない。設定

「あの空をおぼえてる スペシャル・エディション（初回限定生産2枚組）」
DVD/発売中/発売元：ソニー・ミュージックエンタテインメント/販売元：東宝

が小学校ということもあるからだろうが、SCは学校の至る場所に出没して、子どもたちの様子を見守り、時には「保健室行くか？ たっぷりカウンセリン グしてやるぞ！」と、

いたずらをするこどもたちに対してユーモラスに関わったり、時には家まで行って、家の近くにある遊び場で兄の話を聴いたりするのだ。SCはとても自由に、そしてシリアスな映画の中でもコミカルな存在として描かれている。この映画には、「何ものかわからない」SCがコミカルに描かれることで、「わからない」という不安を払拭しようとしているとも思えるのだ。

一方、『明日の約束』ではSCはどのように描かれているのだろうか。『明日の約束』は『あの空をおぼえてる』から約九年後の二〇一七年に放送されている。小日向文世さんは小学校のSC役だったが、『明日の約束』では、私立高校が舞台となっており、井上真央さんがその私立高



明日の約束

「この世で、ちばん謀が残る死」
が、私たちの明日を変えていく

「明日の約束」DVD-BOX 完全版／販売中／¥20,900+税／発売元：カンテレ／販売元：TCエンタテインメント／©2018 カンテレ

校の後任のS.C役として出演している。『明日の約束』では面接室が設えられ、学校の中での会議に出席する場面にも登場する。最初の登場場面で、周囲の先生方から「前の担当（前S.C）みたいに、相談室で大人しくしてくれば良いのに」と言われたり、「S.Cなんて、ちゃんと学校に居ますよってポーズだけで十分なんだから、仕事増やささないでくれよって感じ!?!」と陰口を言われる場面がある。S.Cが学校の管理職には一目置かれる存在である一方で、学

校という組織の一員として、現場レベルではまだまだ受け入れられない面もあるというふうに描かれているが、それは現在のS.Cが直面する現実的な側面だと言えるだろう。そしてこの物語は不登校生徒の家庭訪問をきっかけに、S.Cとして認めてもらいたい気持ちや焦りが生徒を自殺へと追い込んでいく。

『あの空をおぼえてる』では、バイプレーヤーとしてS.Cが登場し、兄英治のこころの支えとなつて家族が妹の死を少しずつ受容していく過程を見守る貴重な存在として描かれて

ている。一方で『明日の約束』でS.Cは、学校という組織の中でS.Cが位置付けられているようにみえるのだが、クラスメイトの自殺で動揺する生徒たちに対して「落ち着きなさい」と声をかけ宥める担任教師を蔑ろにする形で、「落ちつかなくていいよ。クラスメイトが一人亡くなっているんだから。無理に感情を抑える方がストレスを生みます」とクラスメイト全員に呼びかける姿を描き、周囲

傷（了た癒）手 (Wounded Healer) 小日向文

が見えない存在として描かれている。この二つの作品を比べてみると、純粋にS.Cが学校にも認知されてきていて、学校の中で機能してきている、と手放しで喜べるものではないように感じるのは筆者だけであろうか。むしろ、二〇〇八年のS.C全校配置以降、一〇年以上経った今、新しい問題に直面していると考えることができないだろうか。

この二つの作品に共通しているのは、S.Cがどちらも傷ついた存在として描かれていることだ。小日向文世さん演じるS.Cは自分の妻を亡くし、そのことを兄、英治に語りかける場面がある。「俺も大切な人を亡くしてね。（中略）死んだことをずっと受け入れられないんだ。辛かった。それで自分も死のうかと何度も考えた、そしたら、こんなになつた」と禿げ上がった頭をニヤツとしながら見せる。一方で、井上真央さん演じるS.Cも同様に母子関係の問題を抱え、生徒の背後にある母子関

係の問題に自分と母との関係（支配的な関係性）を無意識に重ね合わせていくのだ。筆者がこのことから想像するのは、社会の中にある暗黙の理解として「同じような経験をした人でないと理解できない」という考えが未だに根付いているということだ。不登校の経験を持った人だから今まさに起きている不登校に深い理解を示せるかという点必ずしもそうではない。むしろ、それは障害となることの方が多い。こういった考え方は、心理臨床家が臨床活動を通して個人的な傷つきを間接的に癒すことを隠れた動機付けとする「傷ついた癒し手 (Wounded Healer, Henry, 1966)」の見方とも一致するだろう。S.Cの制度が始まり、今では中学校を中心に一万校以上の学校に配置されるようになった。いじめの深刻化や不登校の増加、災害派遣などS.Cの活躍の場はどんどん広がりをみせている。だからこそ、心理臨床に携わる私たちは自らの内面に謙虚に向き合う必要があるのだろうと、自らも自戒の念を持たざるを得ないのである。

映画「英国王のスピーチ」

(二〇一〇)

愛育クリニック／あざみ野心理オフィス

山口貴史

はじめに

星野源はこの映画をみて、「一人スタンディングオベーション」をしたといえます。この映画のラストシーン、すなわち一九三九年九月一日のドイツのポーランド侵攻を受け、九月三日に英国がドイツに対して宣戦布告をしたまさにその日、主人公である英国王ジョージ六世は、来たる第二次世界大戦に備え、全国民

を鼓舞するためにスピーチを行いました。その英国王の「スピーチ」を目撃すると、みているこちらの体が思わず動いてしまうのは肯けます。

このように最後のスピーチは感動的で、後の英国王ジョージ六世となるアルバート王子（コリン・ファース）と言語聴覚士のライオネル・ロイグ（ジェフリー・ラッシュ）の演技の掛け合いには目を奪われます。しかし、この映画をみていると、地理的にも時間的にも遠い世界に存在

する英国王という人間が一人の深い苦悩を抱えたリアルな人間である事実が浮かび上がり、はっとさせられます。

言語聴覚士は言語能力などを回復させるリハビリを行う仕事ですが、ライオネルの仕事は心理臨床家の仕事と共通する部分が多分にあると思われまますので、紹介します。

「英国王のスピーチ」のあらすじ

この映画は、吃音を抱えた無口で内気な英国王とそれを治療する言語聴覚士の物語です。吃音とはいわゆる「どもり」のことで、話し言葉が滑らかに出てこない発話障害の一つです。

例えば、映画冒頭でアルバートはある会場で挨拶のスピーチをするこゝとになります。観客を目の前にすると言葉が出てきません。周囲はざわつき、冷やかな視線が突き刺さります。やっとの思いで「私は…」と何とか話し出しますが、また止まってしまいます。それどころか、しゃっくりのような音さえ出てきます。

国民の前で話すことが重要な仕事である王室者にとって、このような障害を抱えることは致命的であり、絶望そのものであることは想像に難くありません。そのため、アルバートは自身が国王になることを望んでいませんでした。

父親の死後、兄が王位を継ぐことになりました。しかし、自由奔放な性格の兄は離婚歴があり家庭のある女性との結婚を望んだため、伝統的で厳格な王室と議会からは王位に相応しくないと反対の声があがります。さらに、ナチスが台頭する国際情勢の中、安定的に国を統治することが難しくなります。遂に兄は王位を辞して結婚を選び、アルバートがジョージ六世として王位継承することになります。肝心の吃音は治っていません。さて……。

「英国王のスピーチ」から考える心理臨床のフィクションとリアリティ

ライオネルの治療は実際の心理臨床の仕事とは大きく異なる点もあります。例えば、心理臨床の仕事では治療者とクライエントが友人関係に



『英国王のスピーチ』/発売中/¥1,143+税
/発売・販売元：ギャガ/©2010 See-Saw
Films. All rights reserved.

なることや治療者の家族を紹介するなどは原則としてありません。他にも心理臨床の立場からするとフィクションはありますが、ここではリアリティの方に比重を置いて、以下に共通点を解説しようと思います。

一つ目はクライエントの歴史性と物語性(ナラティブ)を大事にする点です。これらは簡単に言えばその人の人生がどういうもので、どういう風に形作られ、現在困っていることがどのような経緯で起こってきたのかを自分自身の中に位置づけることです。

ライオネルの元を訪れる前、アルバートは当時の有名な治療者と呼ばれ、口にビー玉を詰めるなど(?!)、様々な治療法を試みましたが、効果がなく行き詰っていました。その頃、数々のスピーチを失敗した記憶、激しく怒る父親の表情、子どもの頃に吃音を馬鹿にしてきた兄や周りの子どもの声といった「苦悩の記憶の断片」が、日々の生活の中で、あるいはスピーチを失敗する度に突然脳裏に浮かび、苦しみを続けていました。しかし、苦しんではいらぬもの、自分が何に苦しんでいて、なぜ苦しいかが自分では分からない状態でした。

ライオネルの元を訪れた時、アルバートはこれまで同様に吃音という症状の除去を求めました。ライオネルは「(アルバートの)吃音はなぜ起るのか」という疑問をもちながらアルバートと会いました。この「(アルバートの)」というところが肝要です。なぜなら、吃音という症状(事象)は同じでも、人それぞれにその理由は異なるからです。ライオネルがそうした観点をもちながら

アルバートと会うようになると、彼の「苦悩の記憶の断片」が「苦悩史」へとまとまってくる。

すなわち、左利きに生まれ厳しく右利きに矯正されたこと、乳母から虐待されていたこと、父親から過酷な躰を受けていたこと、兄から吃音を馬鹿にされたこと、弟を亡くしたことなど、これまでの体験が一つの自分史としてまとまったものへと変化し、自身の中にある混乱が整理され、自分が何に苦しんでいて、何が不安なのかを理解できるようになっていきました。それとともに、吃音も少しずつ改善しました。

二つ目は「地味である」という点です。「吃音に苦しむ英国王の治療をする物語」と書くドラマチックな展開が起るように思えますが、描かれていることは地味で地道なことの積み重ねです。魔法のように吃音は治らないし、アルバートは同じような失敗を繰り返します。プライドを捨てて努力した分だけ、治らないことへの失望は深まり、苛立ちを募ります。ライオネルにその苛立ちをぶつけても、治療を続けることを

求められます。気を取り直して通い続けても、また同じ失敗を繰り返す。おまけに現実生活では父の死、兄の奔放な振舞い、それに伴う国の情勢不安、自身と対比的に雄弁なスピーチを行うヒトラーの台頭など、心が折れそうなのが何度も起こります。そして、半ば喧嘩別れのような形で治療は中断します。アルバートは変わらぬ現状に幻滅し、ライオネルは深く傷つきます。しばらくの間、治療は再開されません。しかし、互いを意識していること、治療が終わっていないと感じていることは映像の端々から感じられます。そして、治療が再開され、また地味な治療の日々が始まる……。

最終的には非常に感動的なラストシーンが待っているけれど、そこに至るまでの道のりはコツコツ、コツコツとした過程であり、そこに私は心理臨床のリアリティを感じました。

吉祥寺だけが 住みたい街ですか？

上智大学大学院／横浜西口カウンセリングルーム

内田 亮

不思議な不動産

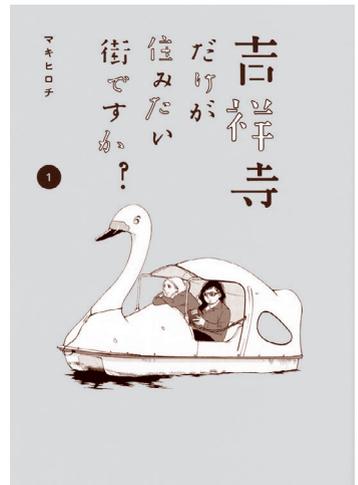
大っぴらに破綻こそしていないものの、なんとなく日常がうまくいっていない気がして、考え込んでしまうことがあります。そういう時は、持ちもの、着ているもの、住んでいる部屋、全てがどんくさく見えて、総取り換えしたくなりさえするのですが、皆さんも「今のこのさえない生活は、ひよっとしてこの街のせい

なのではないか。だとしたら今の生活を変えるためにも引っ越ししてみようか」と思うことはないでしょうか。

引っ越しは良くも悪くもその人の生活を一変させます。そして一変した新しい生活を東京有数の住みたい街、吉祥寺で始めようとする女性たちが、とある不動産屋を訪れるところから、今回紹介する漫画『吉祥寺だけが住みたい街ですか？』（マキヒロチ作、講談社）は始まります。

ある三〇歳前後の女性がこの不動産屋を訪れます。五年間介護していた母親が他界し、東京への転勤が決まったので部屋を探しに来たのだそうです。彼女は、「ニギニギして、治安良さそうだし、友達できそう」と吉祥寺への憧れを語り、初めての一人暮らしは不安だからと女性専用物件を希望します。

その不動産屋は双子の姉妹によって営まれています。来客がない時は、音楽を聞いたり、昼寝をしたり、とにかく自由な姉妹のようです。双子は一旦、吉祥寺の物件を案内します。しかし繁華街という立地に彼女が難色を示すと、「まあでももつといい街あるよ」と吉祥寺とは全く関係のない街、駒沢大学駅に彼女を連れて行ってしまうのです。オリンピック公園や、商店街、緑道などを案内した後、双子は彼女にタワー型のシェア住宅を紹介します。彼女は話が違くと混乱しますが、内見が進むにつれ、女性専用フロア、



講談社刊

さらに共有スペースでの入居者との交流を通して、「家に帰って誰かがいる感じがいいですねえ」と気持ちの変化を語り始めます。そして母親が亡くなってから、家に帰っても人がいないことが寂しかったことを振り返り、帰宅した時に誰かがいるこのシェア住宅への入居を決め、介護が終わった今、自分のために生きてみようと思うようになったことを語ります。

本当は何を求めているのか

ある人は仕事上の失敗から、ある人は交際関係のうまくいかなさから、と理由は様々ですが、ともかく何かを変えようと思ひ集まってくる彼女

たち（作品中で男性の顧客は登場しませんが）が共通して抱えているのは、閉塞感であり、日常生活に遷延する行き詰まり感、そしてそうした生活から心機一転やり直すことへの期待です。

新宿、渋谷など主要駅へのアクセスが良く、商業施設やレストランが豊富、かと思えば近くには公園もあり緑豊かなその土地柄から、吉祥寺は住みたい街ランキング上位の常連であり、そうした吉祥寺の持つポジティブなイメージが自分たちの行き詰まり感を打開してくれるのではないかと？という彼女たちの期待はもつともなようにも思えます。

しかし訪れた不動産屋の双子は、引越しの理由を聞くや否や「それなら吉祥寺、やめよっか？」という言葉とともに、雑司ヶ谷とか、錦糸町とか、蒲田とか、地理的にも雰囲気的にも吉祥寺とは全然違う街に彼女たちを連れて行ってしまおうのです。当初彼女たちは戸惑いますが、徐々にそもそもなぜ吉祥寺に住みたかったのかを考え始めるようになり、そして双子との会話の中で、自分が

吉祥寺に対して持っていた期待、それがどんなものだったのかを見つけ出していきます。

自分のことは自分が一番わからない

人は自分の気持ちや考え、欲望の全てを把握することはできません（これを発見したのは精神分析の祖フロイトです）。把握できないので語ることもできないし、時に人の欲望を自分の欲望として読み間違えられます。なんとなく住みたい街ランキング上位の吉祥寺を選ぶというのは、この読み間違えに当たるといえるでしょう。

しかし不動産屋の双子は、実際に物件があるうがなろうが、言われるがまま「吉祥寺の物件」を提供することはありません。「吉祥寺の物件」そのものよりも、その人が吉祥寺に何を期待しているかを嗅ぎ取り、本人がその実本当に必要なとしているものを紹介しようとするのです。これは「とりあえず吉祥寺に住みたい」という言葉でしか表現できなかった、彼女達の期待や希望をすく

取っていると云えるのではないでしょうか。

双子のこの機能は心理臨床におけるセラピストの仕事に繋がっています。心理臨床の言葉で言えば、「吉祥寺に住みたい」というのはクライエントの意識的ニード、「こんな生活を送りたい」というのが内的、無意識的ニードと言えてでしょう。そして意識的ニードについて考えながら、同時に無意識的ニードがどこにどんな形であるかを考えるというのがセラピストの大事な仕事になります。

作品中の双子のように、セラピストもまた、クライエントの意識的ニード、つまりクライエントが求めるものを、そのまま提供するとは限りません。その人がなぜそれを求めているのか、なぜ必要なのかを聞き、その人が求めているものの背後にある、その人もまだ知らない、言葉にできていないニードを探し出そうとします。そしてクライエントの表面上のニードと、内的なニードを複眼視し、その両方を取り扱っていくということが、重要だとされます。双

子は、セラピストのこういった仕事を不動産屋とお客さんという関係の中で実践しているというところが大変興味深いです。

視界が開ける体験

各エピソードの最後には、新しく引越した街の風景が見開きページに大きく描き出されます。それは当初期待していた吉祥寺ではなく、自らが思い描いたわけではないものですが、それでも妙にしっくりくる街の風景です。

この見開きページには文字通り視界が開けたという感覚が図像的に表現されています。今まで価値を置いていたものが相対化され、価値を感じていなかったものに、価値を見出す感覚、そしてこの視界が開けるといふ体験は、心理療法を受けた時に体験される感覚に近いでしょう。なんとなく日常生活がうまくいっていないと感じる時には、引越しと併せて心理療法を検討してみたいかがでしょうか。

傷ついた治療者と、 それでも終われない臨床

はじめに

ナンニ・モレッティ監督の『息子
の部屋』（二〇〇一年度カンヌ映画
祭パルムドール受賞）は、主人公の
精神分析医ジョバンニの日常が描か
れていく序盤と、不慮の事故で息子
を失い悲しみに沈む中盤、再生への
微かな希望が見えてくる終盤まで、
全編を通して静かながら深くこころ
に染み入る作品です。

豊台病院
松本聡子

主人公とその家族にまつわる物語
だけに留まらず、私たち専門家が自
身のこころを素材にしながら他者の
こころに触れることや、患者との関
係性を使って治療を行っているから
こそ考えなくてはならないテーマも
描かれており、示唆に富んだ内容に
なっています。

リアルな治療場面と
生活者としての治療者

ジョバンニの日課はジョギングで、

その日の朝も街中を走り、帰宅しま
した。すると息子アンドレアの学校
から連絡が入り、アンドレアが友人
と盗難をした疑いで停学処分となる
ことが告げられます。息子を信じた
い気持ちと疑念とが、ジョバンニに
は湧きます。

そこから、患者がカウチに横にな
り自由連想をする治療場面へと移り
ます。この作品の見どころのひとつ
は治療場面で、それぞれの患者が語
る姿は、とてもリアリティのあるも
のに仕上がっています。ある女性患
者は、こころから触れ合える感じが
しない治療者を責め、セッションが
終わるといつも買物をして満たさ
れない気持ちを充足するのだと告白
します。偏執狂の男性患者の猥褻で
激しい語りが続くこともあれば、
「問題は何もない」と言いながら自
殺願望が消えない患者オスカーなど、
個性に満ちた患者たちが登場します。

の精神世界を過ごしています。はじ
めこそ抑制的で、たしかに他者と少
しこころの距離が遠い印象を与える
ジョバンニですが、次第にその人間
味が現れてきます。

強迫症状に苦しむ女性患者の語り
に苛立つジョバンニは、いかに自ら
も強迫的であるのかを示し、不安は
たいしたことではないから気にしな
いようにと患者の話を終了させる空
想を抱きます。五年間、治療中止だ
と毎回怒り続ける女性患者との場面
では、「もう止めたい」、「会いたく
ない」というジョバンニのこころの
声が聴こえてきます。

ある休日、盗難事件以来、距離を
測りかねていたアンドレアをジョギ
ングに誘ったジョバンニですが、患
者オスカーからの電話を受け、急遽
往診にでかけます。そこでオスカー
から、肺ガンの可能性があり動揺し
ていることを打ち明けられます。そ
の間に、アンドレアは海で事故に遭
い、亡くなってしまいます。

傷ついた治療者の臨床からの
撤退

それまで冷静な治療者であったジョバンニは、「あの時、予定通りにジョギングをしていれば」、「オスカアの往診に行っていなければ」と後悔し、あつたかもしれない息子との一日を空想し続け、特定の患者の話には感情が溢れて泣き出してしまい、一方オスカアには酷く冷たい言葉をかけてしまいます。今や、一個人としての感情が、治療関係に入り込んでしまっているのです。

これでは治療を続けられないと感じたジョバンニは、「彼（オスカア）に謝りたかったけれど、謝れなかった」と同業者の友人にアドバイスを求め、オスカアに正直な気持ちを伝えることを提案されるのですが、「それでは分析ではなくなってしまう」と反論します。そしてついにオスカアから治療の中断を申し込まれ、受け入れてしまいます。ジョバンニがアンドレアを失ったことを知っているオスカアも、ジョバンニになにかを伝えたそうでしたが、互いにすれ違ったまま別れます。

これを機に、ジョバンニは休業を決意し、患者たちにそのことを伝える

ます。ある患者は、自分のこころの中にあるものを散々引き出した挙げ句、全て放り出して見捨てるのかと怒り狂います。そこでジョバンニは、患者にとつての治療者の存在と、治療者にとつての患者の存在について気づきを得ているように見えます。ただし、この作品は解説的な台詞はほとんどないので、ジョバンニの心境については想像するしかありません。

終わる物語と、終われない臨床

休業したジョバンニと一家がその後どのような道を歩むのかは、ここでは詳しく触れません。映画が終了したその先にも続く、ジョバンニだけの物語もあるでしょう。しかし私たちの実際の仕事は、そう簡単には幕引きになりません。

臨床場面では、治療者が患者の声に穏やかに耳を傾けられなくなる局面があります。そのような時こそ、患者と治療者との間に生まれる転移―逆転移として理解し、治療へ役立てるように思考するのが精神分析の

視点です。

一方、私たち治療者も、ただの間です。私生活での喜びや悩み、傷つきなど、様々な感情を抱きながら生きています。だからこそ、治療者として機能するためには、今湧き上がる感情は転移状況故なのか、それとも治療者の未解決なこころの課題によるものなのかを見定められるように訓練を重ね、自らが治療を受けられることもあります。

ジョバンニとオスカアの治療では、どのような判断をすることが正解だったのかはとても難しい問題です。治療者として機能できないと限界を感じたら、臨床を離れるという決断も場合によっては重要でしょう。しかし、ジョバンニが休業を伝えた時の患者たちの反応からこそ、学べるべきものもあります。

心理臨床は、こころの奥深いところに触れていく行為で、扱う内容は得てして心痛や喪失の物語が中心になっしていきます。困っていない人は、私たち臨床家を求めては来ません。それ故に、簡単に始めたり、ましてや終わったりはならないという

責任があります。

実際のところ、ジョバンニのように愛する人を亡くした際の罪悪感や喪失感を抱えながら、治療では患者の哀しい物語を抱えていくという同時進行は、大変辛く耐え難い作業になるでしょう。それでも簡単には終われない臨床にどうにか留まろうとする時、治療者を支えるものは理論であり、同業の仲間であり、スーパーヴィジョンや自らの治療であったりするでしょう。同時に、生きる人間としては友人や家族など重要な他者の存在も不可欠です。そうして治療者として生き残り、ひとりの人間として哀しみを抱えて生きられるようになった先には、傷ついたからこそ聴けるようになる患者の物語があるかもしれません。

日本心理臨床学会「若手の会」活動紹介

日本心理臨床学会業務執行理事 鶴 光代

若手の会の発足と入会資格、運営について

日本心理臨床学会の「若手の会」は、本学会の若手会員が相互の連携を密にし、そのパワーを活かして実践と研究に活発に取り組み、心理臨床学の専門性をもって社会に貢献することを目指して、二〇一八年二月に正式発足致しました。若手の会は、二〇一七年に設立準備に取りかかり、その年の一月に開催された第三六回大会にて、多くの若手会員によって設立集会が行われ結成に至りました。

若手の会の入会資格は、本学会に所属する会員であり、四〇歳未満、または、大学院修士課程もしくは博士課程に在籍中、大学院修士課程も

しくは博士課程修了時から一〇年以内に該当する者となっています。ゆえに、四〇歳を超えていても上の条件をクリアしていれば会員になれます。年齢を気にせず、入会なさってください。この会は、会員の相互の連携を密にし、資質と技能の向上をはかることを目指しています。

入会手続きは、日本心理臨床学会のトップページ (<https://www.jicp.jp/>) から、「活動」↓「若手の会」に進んでいただくと、若手の会の概要と申込フォームがありますので、ぜひ入会をお願い致します。

会の運営は、原則、自主的に運営されることになっており、実質的には、若手の会の会員によって選出された幹事が担います。現在は、設立

時幹事が運営に当たり、会の活動を盛り上げていきます。

幹事・伊藤正哉、井上美鈴、加藤佑昌、古賀聡、鈴木華子、藤野陽生（代表幹事）、古川裕之、鶴光代

若手の会運用内規により、幹事若干名に加えて、本学会業務執行理事一名が幹事となることから、設立時は杉江征業務執行理事が幹事となり、その後、筆者が業務執行理事としての幹事を引き継いでいます。二〇二〇年の二月で、設立時から二年

となりますので、現在、第二期の幹事選出に向けて、準備をしているところです。

シンポジウム等の開催

若手の会の活動として、本学会大会時にシンポジウムを開催し、若手としての問題意識や意見を提唱し討



第37回大会「心理臨床の先達と語る会」の様子

論を重ねています。

二〇一八年八月開催の第三七回大会では、「心理臨床学における若手の挑戦と学び」と題してシンポジウムを開き、登壇した若手の会メンバー三名から若手のキャリアアップとその難しさ、取り組み、挑戦の実際等が話題提供され、フロアと活発な意見交換を行いました。

また、大会実行委員会との合同企画では、「心理臨床の先達と語る会」として、心理臨床の先達と参加者が語り合う会を開催しました。成瀬悟策先生、大塚義孝先生、鑑幹八郎先生という大先輩の先生方のお一人おひとりを囲んで語り合う形式で、三日間に渡って行われました。参加者は、当時、九四歳の成瀬先生をはじめ八〇歳代後半でいらっしやるお二人の先生方が、現役として活躍されているそのお姿と造詣の深さに感嘆すると共に、これからの自身のキャリアを積むその道程に心を馳せ、一生涯の自己研鑽を覚悟した様子でした。

二〇一九年度の第三八回大会では、シンポジウムと懇話会を開催しまし

た。その概要は、第九回メールニュース(二〇一九年七月一日)で次のように紹介されています。

●シンポジウム…「若手の心理臨床家」とつてのワーク・ライフ・エンリッチメント」

三人の若手から、臨床家、研究者、女性治療者、父親としての立場から、結婚や出産、子育てといったライフイベントに関わる経験についての話題提供がありました。結婚や子育てといったことに限らず、多様な生き方があることも話題になり、若手の問題意識や多様性を会場の参加者とも共有する機会となりました。

●若手の心理臨床懇話会…「心理臨床学会の若手は何をしていくのか？」

若手の会会員から話題提供を募るといふ新企画、当日は八人の若手からキャリアや雇用の問題、開業、情報発信のアイデア、ネットワーク作りなどの話題提供がされ、話題提供に対する質疑や議論が活発に行われました。また、会に集まった若手

の参加者同士でつながりを作るきっかけにもなっていました。

若手の会メールニュースと リレーコラムの配信

メールニュースは、第一回(二〇一八年七月一日)から第一五回(二〇一九年二月二三日)まで、活動報告やリレーコラムの紹介等が精力的に発信されています。

リレーコラムは、会の活動の重要な柱で、会員が自身の活動紹介や日々の思いなどさまざまな内容を書いていくという企画のもと、第一回(二〇一八年五月一日)から第二回(二〇一九年二月二三日)まで続いています。

例えば、「心理臨床における修行の喜び」と題するPART1、PART2は、長編で、修行の喜びが熱く語られ、最後に、「セラピストとしての生涯発達のなかで新たな自分との出会いがあるのも心理療法家として修業することの喜び」と締めくくられています。

コラムは、次のようなテーマで続いており、どの回も示唆深く魅力的

です。

「若手の会の紹介」、上記の「PART1」、「PART2」、「臨床と研究と教育とプライベートの板挟みの間で」、「親支援と私生活のつながり」、「よくも悪くも漂う臨床と私の日々」、「心理臨床における発見と学びとその先へ」、「ローカルに光あれ」、「事実が小説よりも奇なりの日々なり」、「院生の頃の気持ちを忘れずに」、「この心自分のもの世界をどうにでも作り変える」、「心理職のキャリアと人生に関する雑感」

若手の会では、今後も、若手の会の会員交流を充実させ、若手の会ならではの問題意識のもとシンポジウム等を企画していきますので、まだ入会されていない若手会員の入会を歓迎いたします。若手のみでなく本会の全会員とともに、人々の心の健康と福祉の増進および将来の心理臨床学分野の発展に寄与すべく活動していきます。

てんてん こころの広場に行く

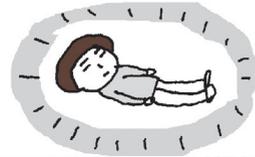


ほそかわ てん てん
細川 貂 々



細川貂々(ほそかわ・てんてん) 1969年生まれ。セツ・モードセミナー卒業後、漫画家、イラストレーターとして活動。「ツレがうつになりまして。」が大ベストセラーに。「それでも母が大好きです」、「わたしの主人公はわたし」、「日帰り旅行は電車に乗って 関西編」、「生きづらいでしたか?」など著書多数。

何もやらないので
何もできない子に
なりました



何もできない子は
何かしようとすると
失敗します

やったこと
ないから
わからんっ

やっぱりダメだった
失敗するたびに
また何もできなく
なります



そんな人が
自分を認める
なんてことが
よくできましたね

と、言われるのですが

何もできない子に
なりたかったわけじゃ
ないんです

私だって
やればできる子
になりたかった



48歳をすぎて
やっと

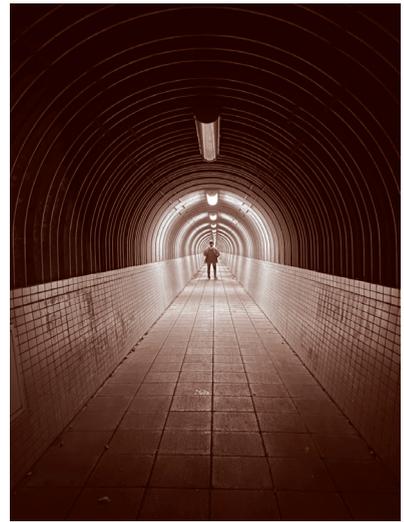
自分のこと
認められる
ようになった

私も
やれば
できる子!!

に、なることが
できました



心理臨床 なよろ



あざみ野心理オフィス 岩倉拓

ながい人生の道行きで、つまずいたり、立ち止まったり、時に転んでしまふときもあります。そんなさまざまな場面で、わたしたち心理士はクライエントの身近な存在でありたいと願っています。困ったときに相談できる、手が届くカウンセラーであるために、現場の最前線で工夫を凝らしている方々に執筆を依頼しました。

人の生病死（生まれること、病むこと、老いること、死ぬこと）にはよろこびとその分だけくるしみが伴います。人生で、生まれることは死ぬことと対であり、病むことは健

やかなことと対になっています。たとえば、あなたの口の中に大きな口内炎ができて、美味しい食事もその痛みで食べられなくなる辛さを知ると、それが治って普通にご飯が食べられる喜びを噛みしめるでしょう。（不思議なことについてのかその喜びをまた忘れてしまうのですが……）

つまり、よりよく「生きる」には「死ぬ」ということを知らないといけないし、「健康」であるためには「病む」ことを知らなければならぬのです。それは表裏であり、不可分なのです。生病死のさまざまな

局面で、その苦しみを共にし、共に考えることがわたしたちカウンセラーの仕事です。

みなさんの身近な場所や、意外な場所にある心理臨床の現場についてお届けできればと思います。

今号の「心理臨床なう」は、「なう」だけではなく、「未来（みらい）」

の心理臨床を予見するものでもあります。場においては「放課後デイサービス」「居場所としてのカドベヤ」「フクシマという被災地」「高齢者施設」と、どこも重要な現場であり、生病死と分かち難く展開されてい

る、今後さらに注目される心理支援の場となるでしょう。

また、その方法として「NPOによるこどもの支援事業」「里親家庭への支援」「司法裁判の専門家証人」と、本当に困っている人に手が届くよう、その対象や領域を拡大する試みや取り組みも進んでいます。

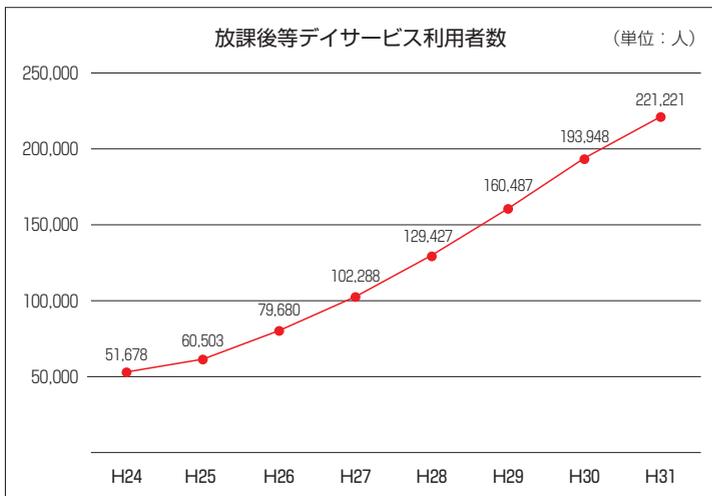
バラエティーに富む現場について読み進めると、今後の心理臨床がダイバーシティの時代に対応し、マイノリティーをサポートしていくという欠くべからざる役割を担っていく未来がみえてくるように思うのです。

放課後等デイサービスって何？

放課後等デイサービスは平成二四年から始まった新しい障害児支援のひとつであり、利用する子どもの数が急増しているサービスです（グラフ参照）。学校（幼稚園及び大学は除く）の授業の終了後または休日に、支援を必要とする様々な子どもたちが集い、自分らしく過ごせる居場所となっているのが放課後等デイサービスです。そこでは、学校や家庭と異なる時間、空間、人、体験を通して、個々の子どもの状況に応じた発達支援を行うことにより、子どもの最善の利益の保証と健全な育成を図ることが目的となっています。

放課後等デイサービスと心理臨床

障害を持つ子どもたちの新たな居場所となり、様々な障害を抱えながら共に生きていくという福祉のあり方を体現しているのが放課後等デイサービスです。利用している子どもたちは、遺伝的な病気、身体的な障



福祉・介護 統計情報 4. 障害福祉サービス等利用状況について (平成24年度4月～平成31年度4月)

害、発達障害、精神障害などそれぞれが支援を必要としています。障害の程度も軽度から重度までと幅広い層の子どもたちが利用していて、様々な障害の種類や程度に合わせて、支援の形態にも様々なものがあります。

のことも考えながら支援をしています。

おわりに

放課後等デイサービスでは児童指導員、保育士等の多くの大人が子どもたちに関わり、子どもたちの成長

す。心理専門職にとっても新しい分野の仕事であり、応用行動分析行動療法、精神分析的アプローチ、音楽療法、遊戯療法等とそれぞれの施設で様々な取り組みが行われています。また、障害の程度にかかわらず、「子どもたちがどのようにしたら生活しやすいのか?」「この子の良いところは?」「お友達と過ごすためには?」と日々、この子にとって学校・家庭・社会はどのように感じられる

を支えています。心理専門職として、家庭環境も含め、子どもの状況を見立て、子どもたちにとって必要な支援を考え、様々な大人と連携しながら実践していくことが必要です。子どもの成長には、養育者の支援や地域との連携が必要であり、一人の子どもが育つため多くの大人の力が必要となってきます。今後は、心理専門職が子どもを支える大人の架け橋として重要な役割を担っていくことが必要です。

● 参考資料

- 放課後等デイサービスガイドライン <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakatei-engokushougaishuokenfuku-shibu-Kikakaku/0000082829.pdf> (厚生労働省)
- 福祉・介護 統計情報 4. 障害福祉サービス等利用状況について https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsite/bunryu/nukushi_kaiغو/shougaihanukushu/voukei/index.html (厚生労働省)

「コミュニティ心理学からみた居場所「カドベヤで過ごす火曜日」

東北福祉大学 秋田恭子

はじめに

伝統的心理学的支援法では、クリニックや病院で支援が必要な人の来訪を受け身で待つため、そこに来ない人々には援助が行えません。これに対し、一九六五年のポストン会議に端緒を持つコミュニティ心理学は、生活の場に援助者が出向き、援助を必要とする人を探るのが特徴です。様々な専門家と非専門家が連携して支援を行い、「Community」の意味は、地域といった管轄区のような場所を示すような意味ではなく、もっと深

い意味」があり、「人がともに生き、それぞれの生き方を尊重し、主体的に生活環境システムに働きかけていくことを意味」します（山本、二〇〇〇）。

「カドベヤで過ごす火曜日」

今回、この立場から興味深い居場所「カドベヤで過ごす火曜日」を紹介いたします。運営代表の慶應義塾大学の横山千晶教授によれば、カドベヤは、慶應義塾大学教養研究センターの二〇〇九年の文部科学省大学教

育・学生推進事業の社会連携教育の一つとして設立され（二〇一二年に事業は終了し、現在は自主事業）、大学の座学中心の教育を補完し、「身体知」を通して高度な学術

言語・教養言語による発信に繋げる教育システムの構築を目標としています。また、個々の学生が生活の中に持つ居場所の一つとして、授業の枠を超えた中・長期的な自律学習の場所として、利用することも目的です。

場所は、かつては日雇い労働者の町として栄え、現在はいわゆる「ドヤ」となっている、横浜市の寿地区近辺です。毎週火曜日の一八時には開場し、一九時から二一時頃まで集まり、参加費は一回五百円で、一時間間の言語や身体による表現活動の後、共に食卓を囲むという活動状況です。

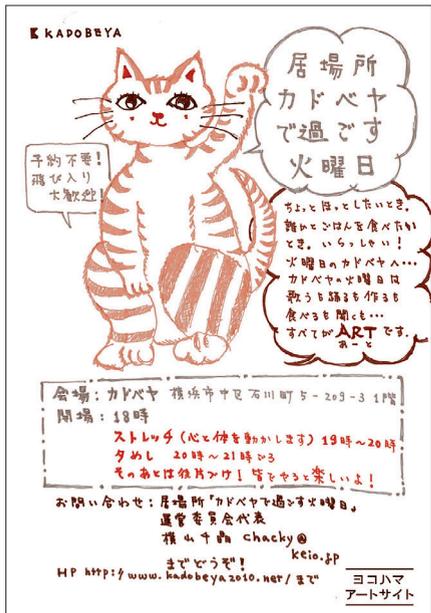
おわりに

予測性のない「非日常」的な表現活動の後に、「日常」的な夕飯から後片付けを通じて、他者との共存の中で自分なりにできることが見えてきます。生活システムの変化までもたらさないものの、参加者の「日常」の生活に影響を与えます。参加

者のバックグラウンドは問われず、会話の中で語られるに任せられますが、身体障害、発達障害、元ひきこもり、アルコール依存、生活保護の方々、子供、大学生、アーティストなど様々な人が参加します。「生きることの安心感と豊かさについて考えをめぐらすことはこの『居場所』の運営の基礎」です（横山、二〇一七）。臨床心理の専門家の公式な関与はありませんが、こうした活動は、コミュニティに臨場して要支援者を見出していく実践の一つの在り方として示唆に富み、私も一人の臨床心理士として、今後も見守って参りたいと考えています。

●引用・参考文献

- 山本和郎（二〇〇〇）『危機介入とコンサルテーション』ミネルヴァ書房
- 横山千晶（二〇一七）『共にいるということ——居場所「カドベヤで過ごす火曜日」——』『質的心理学フォーラム』V.1. 9、一四—二二



はじめに

私は、二〇一一年三月十一日の東日本大震災後、一〇月に緊急スクールカウンセラー（以下、SC）派遣事業に応募したことをきっかけに、SCとして相双地域の県立高校（四カ月間）と小学校（五年間）に行きました。その後、県中地域の県立高校に異動して三年目になります。被災地外から中長期の支援に入るという視点から、これまでのSC活動をふりかえってみたいと思います。

活動中に心に留めていたこと

震災半年後から中期にかけては、教職員の方々などの大人の疲弊が目立ちました。大人は子どもの支援者であることを求められ、デリケートな立場や関係もあります。被災地外から来たSCとして先生方や保護者から被災状況を聴く時は、その方もひとりの被災者であることを忘れなようにしていました。

震災後、時間が経過するにつれ、

震災・原発事故被害があまり語られなくなり、その影響が見過ごされがちになっています。児童・生徒さんを理解する時に、「震災の時に何歳だったのか?」「何か被害体験はあるだろうか?」ということは念頭において話を聴いています。たとえば、原発事故からの避難生活で小中学校の転校を繰り返してきたことが、同世代との関係性に影響を与えているのではないかと思われる生徒さんや、非常に不安定な気持ちの背景に、震災後の大きな家庭環境の変化があったりします。

同時に、支援の「終結」を考えない訳にはいきません。先生方へのコンサルテーション、面接のフィードバック、生徒理解や対応に関する先生向けのお便り等を通じて、校内の教育相談体制作りを支援することを大事にしています。黒子に徹する姿勢を、都内でSCとして活動する時よりも一層意識しています。

中長期支援を支えてくれるもの

東京から福島に毎週のように通勤するのは、相双地域への勤務の時には前泊もありましたので、時間的、体力的、精神的、経済的に負担がなはいえませんが、国と福島県による予算的裏付けがあり、報酬と旅費交通費が支給されていることは非常に支えになっています。中長期にわたって支援を継続するためには必要かつ大切なことだと思います。

今後の課題

心理職として支援のための知識やスキルの向上に努めたり、心理職の職能団体として組織的な体制づくりは本格的に進められています。さらに今後は、私もできていくわけでは

ありませんが、臨床現場の知見を国や行政の施策につなげていく努力や工夫が必要だと考えています。とくに原発事故・放射線被害は社会的・政治的な課題であり、長期的にどのような影響があるかも明らかではあり

りません。

震災後九年が経過し、メディアでも「復興」ばかりが目立ってつづいてきたところから、被災地の人々の姿を見て、私たちが安心したいという気持ちが働いているかもしれない。しかし県内行方不明者一九六人（二〇一九年三月八日時点 警視庁）とその家族がおられることを忘れてはなりません。心理職として、今も色々な問題を抱えて苦悩している人々の声を社会に届けたり、施策につながる活動ができればと思っています。

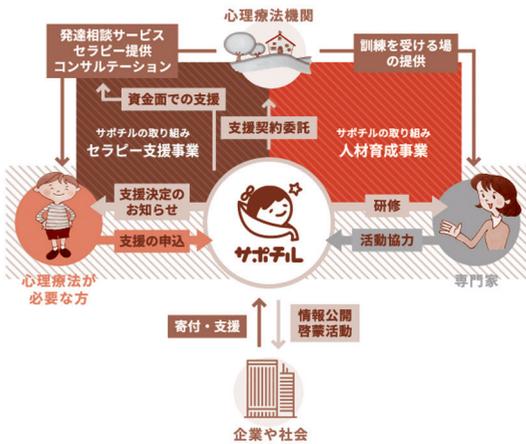
サポチルという認定NPO法人——お金のない家の子どもに心理療法を届ける仕組み

岐阜大学教育学部／認定NPO法人子どもの心理療法支援会

松本拓真

子どもを社会で育てる仕組み

子どもへの心理療法は、受ける子どもと家族が恩恵を得るから家族が費用を負担すべきだとすれば、お金のない家の子どもは心理的支援を受けられません。しかし、その子が心理的支援を受けられたら、誰も発見できなかったことを発見する人に成長したかもしれませんし、多くの人を救う人になったかもしれません。子どもが育たないことによる社会的



な損失は大きい一方で、現実的には児童相談所の職員は常に不足し、継続的な心理療法を提供する公的な機関はほとんどないなど、子どもの心への社会的な関心は高くありません。公的な機関が無理なら、民間の機関で子どもを支える仕組みを作ろうと二〇〇五年に京都で発足したのが認定NPO法人「子どもの心理療法支援会」(通称サポチル)です。

発達障害と被虐待の

二つに絞る理由

公的機関なら財源は税金ですが、民間で家族からお金をとらないなら寄付金などで集めるしかありません。一回五〇〇〇円の心理療法を毎週提供すると、一人に対して一年当たり二〇万円が必要です。日本は特定の機関に寄付をして社会的なインフラを整えようとする風土が乏しく、資金集めには苦慮しています。サポチルは資金提供機関であ

り、心理療法自体は契約機関に委託していますが、その心理療法は精神的心理療法に限定しています。来談理由は、不登校・暴力的な言動・抑うつなど様々ですが、支援対象は発達障害を抱える子どもか、虐待を受けた子ども(里親も含む)に限定しています。資金的な理由もありますが、精神分析的な心理療法が特に貢献できる領域だからです。幼少期から他者との関係が乏しい、心地良くない、むしろ怖いと感じた体験により通常の発達から逸れていった子どもは、苦痛が日常的かつ長期にわたるため短期間で回復しろというのは酷な話です。精神分析的なプレイセラピーの技法は、彼らの声にならない声を聞き、見失われていた心を一緒に発見することを可能にするのです。

専門性を育て、社会に還元し、土地に根付き、社会を変える

精神分析的な心理療法を実践するに

は、高度な訓練が必要であるため、サポチルは人材育成にも力を入れ、同時に研修の提供により得た収益を心理療法支援に回しています。良いエビデンスの蓄積は社会が心理療法を認め、公的資金が投入される変化も期待されます。しかし、エビデンスには数が不可欠ですが、多くの子どもに心理療法を提供できるだけの財源がないのが現状です。

また、どれだけ立派な仕組みでも、利用できる距離になれば意味がありません。京都・大阪で発足したサポチルは、二〇一八年から関東でも活動をはじめ、さらに活動拠点を増やす計画があります。そのためには、スタッフ・寄付金・協力者などが大幅に不足しており、本稿を読んだ皆さんにぜひご協力いただければと思います。二〇一四年には仮認定、二〇一七年には認定NPO法人となり、寄付金が税金の控除を受けられるようになりました。詳細は <https://sapo.jp/> をご覧ください。

四万五〇〇〇人の家族と暮らせない子どもたち

わが国には、親の病気や虐待など、様々な理由で家族と暮らせず、里親や児童養護施設のもとで暮らす子どもが約四万五〇〇〇人います。その子ども達は、実の親との人生早期の分離を体験しているだけでなく、中

には虐待などの不適切な養育を経験してきた子どももいます。そのため、他者への基本的信頼感の形成不全、トラウマや発達特性にもとづく様々な困難を抱えていることも少なくありません。このような、生き延びることや様々な環境に適応することにエネルギーを費やしてきた子どもたち

の多くは、国連子どもの権利条約(第三一条)にも明記されている自由な「遊び」の体験を奪われてきています。

主体的な「遊び」を中心にした支援

私が所属するSOS子どもの村JAPANは、「No child should grow up alone」子どもが孤独に育つことがない社会へ」をスローガンに、子どもの権利保障を軸にした里親による家庭養育や、家族分離の危機にある子どもと家族への支援を行っています。その活

参加するおとなのルール

- I. 子どもと一緒に心から楽しむこと。
- II. 不快な気持ちや、「やりたくない」気持ちも大事にすること。
- III. 子どものチャレンジしたい気持ちを最小限の手助けで最大限応援すること。
- IV. 子どもとの関わり方はいろんなおとながいてOKだけど、疑問に思った時は、皆で話し合うこと。子どもの意見も聞いてみること。
- V. 子どもが持つてくるゲームやおモチャは、子どもの居場所として考えること。
- VI. 子どもの暴力的なコミュニケーションについて—その子のコミュニケーションのひとつの形であると考え、その行動の意味を受けとめていく。その際、こちらも無理はせずに、受け入れることのできる限界と、受け入れられる形を子どもに伝えていくこと
- VII. ……

*このルールは、参加している皆さんと一緒に作りあげていきます

多様な大人が関わり、安心してできる社会を体験する

動の一つ、里子のための遊びプログラムが発展し、二〇一七年に「子どもと遊びプロジェクト(以下、こぷろ)」という市民団体が誕生しました。「こぷろ」が提供する遊びの場には、研修を受けたボランティアポーターがいて、「参加する大人のルール」があります。子どもの遊びたい気持ちを阻害せず、しかし心と身体の安全を守るよう配慮しながらともに遊びます。「こぷろ」では、自分の興味関心にそった自由な「遊び」が大切にされています。

「こぷろ」のボランティアサポーターの年齢層は一八才から六〇才以上と幅広く、心理臨床家、社会福祉士、保育士などの専門家だけではなく、学生、会社員、カメラマン、フリーター、退職後のアクティビシニアなど多種多様です。しかし、「遊び」の中では子どももどんな大人もあつ

という間に対等な関係を築くことができます。「こぷろ」は、「遊び」を通して子どもも大人も仲間になり、そのことで里親家庭への理解者が地域に増え、新しい「居場所」とつながりができていくことを目指します。そして、「遊び」を通して体験する他者との情緒的つながりや楽しさが、他者への不信感や大人になるとの不安を抱える子どもにとつて、安心して大人や社会があることを感じられる体験になればと願っています。

最近では、この遊びプログラムを経験した高校生による「ユースと遊びプロジェクト(ゆぷろ)」も誕生しました。遊びを通してつながった子どもが若者となり、思春期や自立の困難をともに乗り越える仲間になっていきつつあります。「こぷろ」から「ゆぷろ」へ、子どもの成長とともに育っていく「こぷろ」を、どうぞ応援いただければ幸いです。

● 問い合わせ先 office@ko-pro.org

司法裁判における専門家証人

専門家証人とその仕事

専門家証人とは、専門家、たとえば医師や科学者などが、事件に関連する自分の専門的な意見を法廷で話します。私はこれまで二件、弁護側証人として地裁で証言しました。ちなみにこの原稿を書くにあたり確認したところ、法廷で証言した詳細は、新聞等マスコミでも報道されており守秘の必要なしとのことでしたが、加工して記載させていただきました。

私は家族療法／ブリーフセラピーの専門家として、家族間で起こった殺人事件における動機解明を依頼されました。被告人は殺害は全面的に認めつつ、動機がわからないという供述を繰り返ししていました。警察聴取や弁護士等も考えられる動機を追究しましたが、本当に動機がわからないのです。

弁護側証人を引き受ける際、「被告人が動機がわからないと述べているのは、解離などの防衛機制による可能性もある。動機解明するうちに

強い殺意に気づくなど弁護側に不利な要素が出たらどうしますか」と弁護士に確認しました。すると「ワイドショーでも大きく注目され、警察も検察も弁護士も本人自身も動機がわからずにいる事件です。弁護とい

うのは量刑を軽くするだけではなく、真実を明らかにし直視を促すのも仕事ですから、弁護に有利不利は一切考えず、ありのままです」と言われました。

そこで、まずは被告と殺害された家族の人物像を良く知る人物、配偶者や友達、兄弟姉妹、親戚などに話を聞き、とりとめのないたくさんのピースを、時系列にまとめてから、被告人本人の面接に臨みました。二件とも、被告は精神的な問題や発達障害のエピソードは見られず、非常にまじめで温厚な人柄で、誰もが「殺人なんてするわけがない」という人物でした。

苦労した点、忘れられない言葉

ダブルバインドなどを用いた非常

に専門的な説明になってしまい、これでは法廷で裁判員どころか裁判官にも難易度が高過ぎるということでもわかりやすく図やイラスト入りのスライドを作ることに時間がかかりました。

また、私が述べることは推論であって事実ではない。つまりどこまでも不確定であるにも関わらず裁判にとって重要な証人と期待されるプレッシャーがありました。殺人のことを考え続けているうちに、なぜその凶器だったのか、なぜその角度から殺したのか、どんな気持ちで逃げたのか、被告の心にダイブするような心境にもなりました。

殺害が起こった家族関係は「濃密な親密さが円環するシステム」。「家族の情愛や温かな日常を保つために殺すしかない、逃げることでできない」という心理状態でした。検察は「殺すくらいなら、なぜ逃げなかったのか」という攻め方をしてきましたが、「家族から逃げる」という選

択肢は思いつきもしないような二人でした。

拘留所で聞いた、被告の忘れられない言葉です。「明日母を殺すと決めた夜、母と一緒に食べた夜ご飯は久しぶりに穏やかな気持ちで食べることができました。とりとめのない雑談が楽しかった」。この時、はじめて涙を見ました。

依頼 本事件の動機解明 家族心理学／臨床心理学(家族療法)からの解説

説明内容：

- 1 被告人の特徴
 - ①生育歴と性格傾向
 - ②認知的特徴
 - ③精神／発達のな特徴の有無
- 2 被害者の特徴
 - ①A氏の性格傾向
- 3 家族内の関係性
- 4 本件につながる被告人の心の動き



実際に法廷で用いたプレゼン資料より抜粋

厚生労働省の統計によると、高齢

者の人口は右肩上がりに増加し、全人口の四人に一人が高齢者になる時代が到来すると予測され、日本は諸外国に例を見ないスピードで高齢化が進んでいます。「フレイル」や「サルコペニア」なる言葉がメディアを賑わせ、地域では介護予防のための取組みが盛んに行われ、シニア向けマンションやサービス付き高齢者住宅など、高齢者向けの施設も次々と建設されるようになってきています。

高齢者が施設入居を決める理由は様々です。「家族に負担をかけたくない」「何かあった時に一人だと心配だから」と自ら入居を決める人がいる一方で、身の回りのことがままならなくなつて入居を余儀なくされた人、自らの意志ではなく子供等に促され、住み慣れた住環境から後ろ髪をひかれながら致し方なく入居する人もいます。

喪失体験

年を重ねること、つまり加齢とは、筋力低下や転倒といった身体的問題、認知機能低下やうつなど精神的・心理的問題、独居や経済的困窮など社会的問題などに直面しやすく、様々な観点から喪失と対峙しなければならぬ時期でもあります。

喪失体験には、大事な人に先立られることだけでなく、家庭内での役割が変化することや、施設入所や転居によつて住み慣れた家や親しかった人達と離れなければならないことも含まれ、施設入所や入居は、喪失反応を誘発する大きなライフイベントでもあるのです。

生涯発達論

ポール・バルテスというドイツの心理学者は、「発達とは全生涯を通じて常に獲得（成長）と喪失（衰退）とが相互に関連しあつて共存する過程である」という生涯発達理論を提唱しました。彼は、高齢者は減

退や衰退としての存在だけではなく、英知を有する可能性を示唆したので、つまり高齢者は、獲得と喪失が光と影のように表裏をなしながら、メンタルヘル스에影響を及ぼす危機が生じやすい人達なのです。

ライフレビュー

入居した施設で、ケアのスタッフから心理相談を試みたらどうかと提案され、相談室の扉を叩く高齢者の多くは、この獲得と喪失をテーマに訪れる人がとても多いと私自身感じています。自らの身体的・精神的機能低下といった喪失に直面して不安が助長される人、自らの人生を顧みて悔恨と自己嫌悪に陥る人、家族との解決し難い葛藤を抱えている人、時に言い憚られる秘密を吐露し始める人に出会うこともあります。

高齢者の話に耳を傾け、寄り添いながら、懸命に生き抜いてきた人生に光を当て直す作業は、人生の紡ぎ直しでもあり、高齢者の英知を呼び

覚ます「獲得」としての一端であるのかもしれない。また高齢者は、認知症の発症リスクも高くなるため、認知症のスクリーニングを行ったり、認知機能の状態から生活の工夫を提案したりすることができるとも臨床心理士の強みと考えています。高齢者領域は福祉の専門家が多くのが特徴ですが、Bio-Psycho-Socialの側面からクライエントをアセスメントできる臨床心理士が果たせる役割は多く、活躍できる場が増えていくものと確信しています。

●参考文献

- Bates, P. B. (1987). Theoretical Propositions of Life-Span Developmental Psychology. On the Dynamics Between Growth and Decline. Development Psychology, Vol.23, No.5, 611-6.

えたのは大変光栄です。間主観性理論（ストロロウ、アトウッド、ブランチャフ）、非線形動的システム（セレンとスミス）、乳児研究（ビービーとラックマン）のいずれにおいても心理療法的な変化は、コンテキストや「セラピストと患者の世界」の予測不可能な絡み合いから瞬間瞬間に現れます。これらの理論が共有している重要な特徴は、セラピストと患者との間で共創造される体験です。自己心理学において別の重要な特徴は、患者の症状を欠損や修正すべき問題として理解するのではなく、むしろ症状は患者にとっての必要不可欠な要素であって、コミュニケーションだと理解することだと言えます。

池：ストロロウ、スターン、ベンジャミンといった人たちの間でも、間主観性の定義がそれぞれで異なっていると思います。間主観性の定義について、意見を聞かせていただけますか？

ジョエルソン：異なる間主観性理論がとてもたくさんあるので、混乱が生じていることと思います。これらの理論は互いに独立して発展していて、二者関係の異なる側面を強調するために異なった形で用語が使用されています。ビービー、ノブローチ、ラスティン、ソーターが、このテーマについて素晴らしい本を共同執筆しています（日本では丸田俊彦が監訳している。『乳児研究から大人の精神療法へ：間主観性さまざま』岩崎学術出版社、2008年）。私が見つけたもっとも有益な間主観性の定義は、ストロロウ、アトウッド、ブランチャフによってなされたものです。システム理論またはフィールド理論と言って、私たちが意識していようとしまいと関係なく、私たちはすべて関係システムまたはコンテキストに常に密接に埋め込まれていると仮定するものです。

池：子どもの心理療法で、あなたがもっとも重要だと思うことを教えてください。

ジョエルソン：もっとも重要なことは、受容、敬意、好奇心、共感、想像、ユーモア、希望の態度でもって子どもに関わることです。そして、しっかりとした設定の中で、予期せぬことが起こることを歓迎することです。そして遊ぶことです。プレイは、セラピストが導き出して解釈を試みるものといった、単なる子どもの創造物

ではありません。もっと言えば、プレイは参加者が各々感情豊かに携わりながら、また想像力豊かに携わりながら共創造される予期せぬプロセスなのです。分析家がかたがた想像は、子どもの想像豊かなレパートリーを広げられることになりますし、その逆もまた然りです。進んでいく自己調整と相互調整のコンテキストにおいて、セラピストは次第に、子どもの世界、治療に連れられてきた子どもの不満、子どもがセラピストの何を必要としているかを理解するようになります。プレイで私は、治療の中で現れていそうな感情を声にすることがよくあります。このことは、子どもが自分自身の感情体験を同定するのに役立つかもしれません。例えば、人形やヒーローといったおもちゃに声をかけることは、さまざまな感情状態を私たちの関係性の中に迎え入れて構わないということになります。子どもは私たちの顔を見て、どのように感じるかを知ります。そして子どもは理解された気持ちになり、遊びをさらに入念にしていくことができます。このように受容的で応答性の高いプレイのパートナーとしてのセラピストの存在によって、子どもは厄介な体験が認識されること、そしてそれが共有されることを発見できるのです。それは、子どもが問題を抱えてまったくの孤独だという孤立した感覚から、待ち望んでいたつながり、帰属、参加の体験に変えるのに役立ちます。

池：エイミー、あなたのお心遣いに感謝いたします。あなたにインタビューする機会が持てたこと、そしてあなたを日本のセラピストや学生たち、皆に紹介することができたことがとても嬉しいです。

ジョエルソン：どういたしまして！ このような機会を設けてくれて、ありがとうございました。

エイミー・ジョエルソン (Amy Joelson)

精神分析的な主観性研究所 (IPSS) で、フランク・ラックマン、ベアトリス・ビービー、ボブ・ストロロウ、ジョージ・アトウッド、ドナ・オレンジ、ジム・フォサーギたちと学ぶ。現在は、IPSS 遠隔学習のための教員および理事、JFPSP 日本精神分析的自己心理学協会連携教員、IAPSP 国際精神分析的自己心理学学会評議委員、IAPSP 学会誌『Psychoanalysis, Self and Context』の共同編集者、IARPP 児童・思春期・青年期および親面接委員を務めている。

WORLD MAP

現代の米国の子どもの心理療法家

エイミー・ジョエルソン先生

NY間主観的自己心理学者

インタビューー 福岡県立大学人間社会学部 池 志保



池：日本の臨床心理士や臨床心理学に関心のある学生たちに向けて、自己紹介をお願いできますか？

ジョエルソン：私はニューヨークでプライベート・オフィスを開業している、間主観的自己心理学者です。これまで子どもから青年、大人にいたるまでを対象に、心理療法および精神分析を25年間行ってきました。元々芸術家（彫刻家）でした。

池：以前、米国では子どもの心理療法はそれほどなされていないとおっしゃっていたように思いますが？

ジョエルソン：米国では、子どもの心理療法が珍しいものではないということは言わなければならないと思いますが、日本のような、大人の心理療法の前駆ともなるような子どもの心理療法についての研究は必要とされていません。精神分析的インスティテュートはチャイルド・トレーニングを強く提案しますし、大人の心理療法とは別個の方針を提案します。子どもの治療は大人の治療ほど厳格になされなかったり、重きを置かなかったりといった態度が示される傾向にあり

ます。プレイや非言語的コミュニケーションが重要であるとは最近まで認識されてこなかったということが要因として大きいかもしれません。大人の治療を理解するためにも大きく貢献し得ることですが。

池：どのようなプレイルームを普段使用されていますか？ 米国では子どもと大人の心理療法で使用される部屋に違いはありますか？

ジョエルソン：ほとんどのセラピストは大人と同じ部屋を子どもにも使用します。これは、プライベート・オフィスと診療所での設定の双方にあてはまります。私のオフィスは居心地の良いリビング・ルームです。大人が見ることのできるおもちゃもありますが、ほとんどはキャビネットやカウチの下に隠されていて見えないようにしています。子どもたちは私の隠し場所をすべて知っていますけどね。いつどのように遊びたいのか、ある時、いつ頃、大人と同じように座って話したくなるのか。それを決めるのは子どもたちです。多くの場合、子どもたちは遊ぶことと話すことのモード間を行き来したり、オフィスを跳ね回ることと話をするためにソファや床に座ることのモード間を行き来したりします。これはすべて意味のあることです。

池：あなたは国際的に素晴らしい子どもの心理療法家です。IAPSP 国際精神分析的自己心理学会第41回大会（ウィーン開催）であなたの発表などをお聞きして、本当に感動しました。子どもの心理療法のための、間主観性理論や関係性理論の最大の特徴を教えてくださいませんか？

ジョエルソン：ウィーンと神戸でお会いできて、本当に良かったです。私の発表を楽しんでもら

九州大学

概要

九州大学では、教育学部および人間環境学府実践臨床心理学専攻、人間共生システム専攻臨床心理学指導・研究コースにおいて心理臨床家の養成を行っております。教育学部は、「教育学系」と「教育心理学系」に分かれており、三次次より系選択をします。さらに「教育心理学系」は、「人間行動コース」と「心理臨床コース」に分かれており、心理臨床コースにおいては、臨床心理学やパーソナリティ心理学だけでなく心理査定法、心理学統計法や研究

法、実験についても学び、幅広い視野と基礎知識を備え、さらに理論的、実践的な専門知識を習得することを目指しています。

また、大学院では「人間環境学府実践臨床心理学専攻」と「人間共生システム専攻臨床心理学指導・研究コース」で学びを深めていきます。実践臨床心理学専攻は二〇〇五年にわが国初の臨床心理分野の専門職学位課程として開設され、二年間で多様な心理臨床の現場における即戦力となる高度な臨床実践力を備え、チーム医療・チーム学校など他職種と連携できる人材を養成します。修了後には博士後期課程に進学すること

九州大学大学院人間環境学府実践臨床心理学専攻

大場信恵

もできません。

人間共生システム専攻臨床心理学指導・研究コースは臨床心理分野の指導者・研究者を目指すコースで、修士課程で臨床実践力と臨床基礎研究力を、博士後期課程で高度な研究力と臨床実践指導力の双方を養成します。どちらの専攻、コースにおいても、所定の単位を取得することで臨床心理士と公認心理師の受験資格が得られます。

大学院では学内実習と学外実習を積み重ね、多様な臨床現場で活躍できる実践力を養っていきます。学外実習は保健医療、福祉、教育領域での実習に臨み、各領域の経験豊富な

実務家教員によるきめ細やかな指導を受けます。学内実習は附属の「総合臨床心理センター」における心理相談、発達相談の実務経験を積んでいきます。

総合臨床心理センター

学内実習を行なう総合臨床心理センターは、一九五四年の「教育相談室」開設以来、一九八一年には「心理教育相談室」として文部省より有



料の相談機関として認定され、さらに一九八六年には「障害児臨床センター」が新設され、二〇〇五年の「専門職大学院 実践臨床心理学専攻」の開設に伴い、「総合臨床心理センター」として「心理教育相談部門」、「子ども発達相談部門」、「生涯発達支援部門」の三部門を有する国



内初の総合的な施設となりました。また、二〇一八年十月からは九州大学のキャンパス移転に伴い、伊都キャンパス内に大型プレイルーム（一五五㎡）二室を含む二十二の面接室、カンファレンスルーム等を配置した三階建ての建物を新築し、充実した環境の下で相談援助活動を行なっています。

当センターでは、三部門で乳幼児から高齢者まで一生涯にわたる多様な相談に対応できる心理臨床家養成のための学内実習の充実化に取り組んでいます。大学院生には複数の部門にわたりケースを担当することを推奨しており、発達障害、知的障害、運動障害、不登校、引きこもり、いじめ、非行、嗜癖、うつ病、不安症など心の問題と発達の問題に関わるケースに対して、各部門の専門性を活かした臨床実習を行なっています。

新規ケースを受ける際は、まず臨床経験豊富な教員のインターテークに陪席し、心理面接

の進め方やアセスメントについて肌で感じながら学ぶことができます。インターテークを行なった全てのケースについて複数の教員による検討を行ない、センターとして支援の方針を決めます。担当しているケースについてはカンファレンスにおいて経過を発表し、コメントや指導を受け、ケースへの理解をさらに深めます。

その際、少人数のカンファレンスでフェイス・トゥ・フェイスの指導を行なうように努めています。また、学内の教員による指導だけでなく、センターに登録されている学外のスーパーバイザーからも個別にスーパービジョンを受けることにより、多面的な理解を得て心理臨床の学びを深めています。

以上のように、私たちは従来の心理臨床教育の基本を重視しながらも、新しいキャンパスにおいてさらに明日の臨床を拓く「こころの専門家」の養成を目指しています。これこそは、臨床心理士第一号であった成瀬悟策先生をはじめとする先達の先生方が築き上げられた九州大学の伝統であると自負しています。

立教大学大学院

立教大学での心理臨床家の養成の歴史

立教大学は、五〇年近く、文学部心理教育学科の時代より、心理臨床家の養成を試行錯誤で行ってきた歴史があります。二〇〇二年、文学研究科心理学専攻臨床心理学コースが、臨床心理士養成の一種指定大学院となり、臨床心理士教育を始めました。そして、二〇〇六年に現代心理学研究科臨床心理学専攻に組織が変わりましたが、改めて一種指定大学院となり、臨床心理士養成を継続しています。

二〇一五年に公認心理師法が成立

し、二〇一七年に施行されると同時に、本大学院では公認心理師養成のカリキュラムを整備し、二〇一八年度からは臨床心理士養成と並行して、公認心理師の養成も行っています。臨床心理士と公認心理師は、民間資格と国家資格などの違いがありますが、立教大学大学院では、同時に教育を行っているため、二つの資格をまとめて心理臨床家、と呼びたいと思います。

養成の柱

—— 知的学習と体験学習

立教大学大学院の心理臨床家の養成の二つの柱は、知的学習と体験学

立教大学現代心理学部 林もも子

習です。学部教育において、心理学の専門教育、また、多様な教養教育を身につける中で、心理臨床家として現場で専門性をもって人と関わりたいと覚悟を決めた人が大学院に進学してきます。そこで、さらに専門的な知識を広げたり深めたりすることももちろん大切です。

しかし、生身の人間である自分自身を道具として、人の一生に関わる仕事をするができるためには、体験を通じて自分を知ること、現場を知ることが非常に大切です。厳しいことを言えば、頭で思い描いているものとは違う現実を体験して、無理だと思う人は他の道に進むことを



選択するしかないのです。無理だということを、仕事を始めて、援助を求めている人に対して迷惑をかけてから気づくのでは遅いでしょう。大学院は、責任をもって援助ができる心理臨床家を育て、送り出すという教育の責任を担っていると考えています。

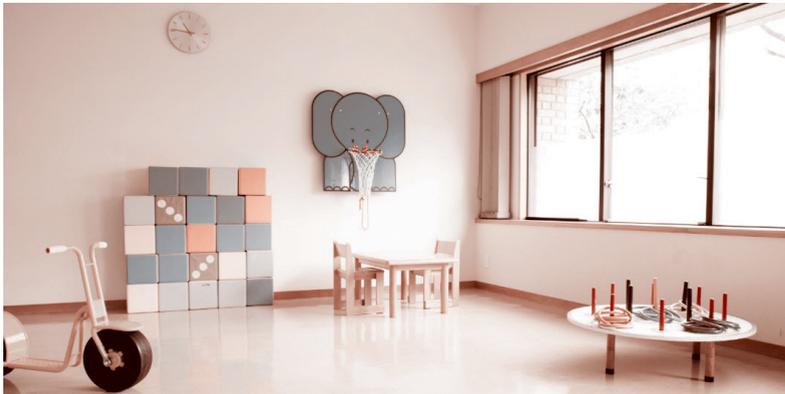
知的学習

知的学習として、大学院に入学す

るとまず学ぶのが心理臨床家としての倫理です。守秘義務、多重関係、他機関との連携など、大学院での学びの基礎としての倫理についての学習をします。修士論文の研究のためにも、心理臨床学的な研究の倫理についても学ぶと同時に、研究実施前には必ず倫理委員会の審査を通らなくてはならないという規則も設けられています。

倫理と並行して、心理臨床における援助の理論と技法を様々な先生から学びます。もちろん全ての理論を学ぶことはできませんが、専任教員がカバーできない理論についてはゲスト・スピーカーなどの制度を利用して学びの機会を増やすようにしています。立教大学は、精神分析、応用行動分析、認知行動療法、家族療法、クライエント中心療法、イメージ療法など、多様な理論的背景の教員がお互いの専門性を尊重しつつ教育を行っているバランス感覚が特徴だと思います。

体験学習



体験学習として、最初はロールプレイや応答構成のような、相互に心理臨床の場面を疑似的に体験しつつ自分の人とかかわりの特徴を知り、また、関係性の中で生じることへの感受性を磨きます。

少し基礎的な学習ができてくると、

いよいよ実際の相談に来られた方を対象に学内の相談機関でプレイセラピーや面接などを、臨床心理士資格を持つ教員の指導のもとで行い、全員が参加する事例検討会（カンファレンス）で検討する機会を持ちます。カンファレンスは教員が一方的に指導するのではなく、学生どうしが率直な感想や質問を投げかけあい、あたたかい雰囲気で行われています。

修士二年になると、学外実習として、医療機関を含む様々な現場に定期的な数か月通って、実習生として実際の患者さん、利用者さんと関わったり、現場のスタッフどうしの連携する様子を目の当たりにしたりする学習をします。学外実習では、守られた学内実習では体験できない、厳しい現実や自分の限界にぶつかって落ち込んだり悩んだりする学生さんも多く見られます。しかし、実習担当教員やゼミの指導教員に支えられて、数か月たつとめざましい成長がみられる人が多く、社会に出ていく準備の助走のいい機会になります。

中には、修士論文を書いて、さら

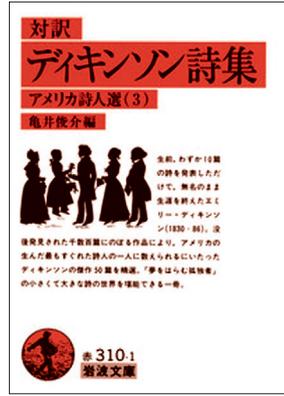
に研究を続けるために博士後期課程に進学する人もいます。博士後期課程に進学しても、研究と臨床を共に続けていく人が圧倒的多数です。

立教大学の大学院の特徴

立教大学の大学院の特徴は多様性があり、力関係が縦よりも横に分散した形の集団であるところだと思います。学生どうしも相互の個性を活かしあい、楽しい雰囲気の中で大学院です。言いたいことを言い合うので大変ですが、空気がよどんでいないところがいいところかな、と思っています。

対訳 デイキンソン詩集

エミリー・デイキンソン〔著〕／亀井俊介〔編〕 岩波書店、一九九八年



首都大学東京名誉教授 岡昌之

心理臨床家にとって、言語感覚は命です。それは、古今東西の詩の名作を読むことによっても養われます。次の詩を読んでください。

わたしは「死」のために止まれ
 なかったの——「死」がや
 さしくわたしのために止まって
 くれた——馬車に乗っている
 のはただわたしたち——それ
 と「不滅の生」だけだった。

わたしたちはゆっくり進んだ
 ——彼は急ぐことを知らないし
 /わたしはもう放棄していた/

この世の仕事も余暇もまた、
 彼の親切にこたえるために——

わたしたちは学校を過ぎた、子
 供たちが/休み時間で遊んでい
 た——輪になって——/目を見
 張っている穀物の畝を過ぎた
 ——/沈んでゆく太陽を過ぎた
 ——

いやむしろ——太陽がわたした
 ちを過ぎた——/露が降りて震
 えと冷えを引き寄せた——/わ
 たしのガウンは、蜘蛛の糸織り
 ——/わたしのシヨールは——
 薄絹にすぎぬので——

わたしたちは止まった/地面が
 盛り上がったような家の前に
 ——/屋根はほとんど見えな
 い——
 /蛇腹は——土の中——

それから——何世紀もたつ——
 でもしかし/あの日よりも短く

感じる/馬は「永遠」に向かっ
 ているのだと/最初にわたしが
 思ったあの一日よりも——

一九世紀のアメリカはニュー・イ
 ングランドの女性詩人、エミリー・
 デイキンソンの「傑作」の一つです。
 死後に発見された原稿で、表題はつ
 いていなかったようです。文庫では、
 最初の一行が表題になっています。

「死」「不滅の生」「永遠」などの言
 葉が鋭角的に迫ってきます。一種ス
 キゾイド的な世界です。ぞくつとし
 ます。彼女の人生の後半は「引きこ
 もり」の日々であったということだ
 す。死後(享年五五歳)に大量の詩
 の草稿が発見され、有名になったの
 です。このあたりの事情は、パスカ
 ルの『パンセ』に似ています。

つまり彼女は、自分自身の精神生
 活のために書いたわけです。その作
 品群が、今ではアメリカの男性の詩
 人ウォルト・ホイットマンと並ぶ大
 詩人の傑作と評価されています。ち

なみにホイットマンは「アウトド
 ア」の詩人として非常に有名です。
 それだけに彼女の元祖「引きこも
 り」の凄みを感じます。味読すれば
 「思春期内閉」の心の理解に役立つ
 でしょう。老年期の理解にも役立ち
 そうです。次の、晩年の詩を読んで
 ください。そして、感受してくださ
 い。訳語が難しいので、原語(英
 語)を参考にするのが良いでしょう。

極楽までの距離なんて/すぐ隣
 りの部屋にすぎない/もしその
 部屋で友が待ちうけているのな
 ら/幸せだろうと不幸だろうと
 ——

何と我慢強いことか魂は、/そ
 んなにも耐えられるなんて/足
 音が近づいてくることに——/
 ドアが開くことに——

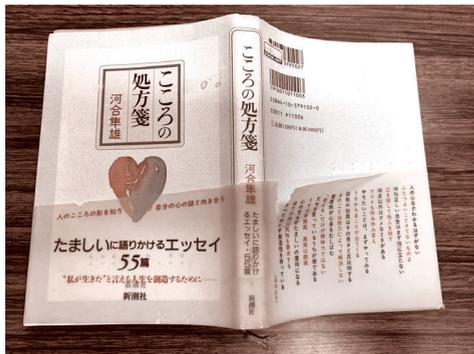
「こころの処方箋」

帝塚山大学 森田健一

これは、心理学に興味を持ちはじめた高校生および大学生に向けて書いています。

高校時代のときめき

高校生の私は、夜見る「夢」に強く惹きつけられていました（よかつたら本誌一〇巻二号二〇頁を参照ください）。図書館で夢に関する本を読み漁り、辿り着いたのは河合隼雄



古本屋で出会って以来、何度も読んできました。

の『明恵 夢を生きる』（講談社、一九九五年）という本でした。夢についての著者の考え方から実際の解釈まで、私にはあまりに衝撃的で、そのときの胸のときめきを今でも覚えていています。

その後、河合隼雄の著書をたくさん読みました。専門書、一般書問わず、河合隼雄の本は「生きる」ということの奥深さや人の心の複雑さを常に考えさせられます。オススメはたくさんありますが、ここでは「初心者」でも読みやすい一般書である『こころの処方箋』をご紹介します。

心の複雑さを割り切らないまなざし

本書は連載がもとになっており、コラム形式で様々なテーマが論じられています。その最初のタイトルが「人の心などわかるはずがない」という、なんとも衝撃的なものです。心理学を学びはじめた人には「人の心がわかりたい」という動機が少なからずあるでしょうし、当時の私

にもありました。しかし、本文に目を向けると、「人の心がいかにわからないか」ということを、確信をもって知っているところが、専門家の特徴である」とあり、単純に「わかるおゝわからない」という水平方向の問いとは違う次元からまなざしがむけられていることがわかります。

それは、人の心に潜む未知の可能性を大切にすまなざしです。本書では、日常で私たちが経験する様々な苦悩や戸惑い、人と関わる難しさが具体例とともに挙げられています。が、いずれも表面的な解決を急がず「ゆっくり構える」ことで「有益な発見」が生じてくる、という視点を大切に語られています。

このように、本書を読んでいると出来事に対して反射的に対応するのではなく、一旦「間」をとってその出来事と向き合い、背景に広がる世界を想像しながらその先の展開をじっくりと待ってみようという「心の余裕」が生まれてきます。そのとき、

河合隼雄（著）

新潮社、一九九八年

一般的に自明と思われることでも、「本当にそれでいいの？」とわかっているつもりでいる自分が問答されているような気持ちにもなります。

『こころの処方箋』というタイトルで想像されるような「即効性のある薬の処方」というよりは、あらゆる出来事に対して向き合う「生きる態度を見つめ直す機会」を与えてくれる本ではないかと思うのです。

ときめきを追い続けてください

このコラムでは私自身が高校生のときに衝撃を受けた本の一冊を紹介しましたが、本を読むときに私が大切にしているのは、「未知との出会いに対するときめき」です。それを追い続けることが結果的に勉強にもなっているように思います。どんな本にも、ときめきの素は潜んでいます。まずは気になった一冊を手にとり、ゆっくり読んでみてください。機会があれば、あなたのとときめきを教えてください。

心理療法がひろく未来——エビデンスにもとづく幸福改革 リチャード・レイヤード、デイヴィッド・M・クラーク(著)／丹野義彦(監訳) ちとせプレス、二〇一七年



関西学院大学 松見淳子

幸せな社会の創生

イギリスでは二〇〇八年から「IAPT:心理療法アクセス改善政策」が施行され、世界的な注目を集めています。著者らは「社会は心の健康にどう取り組むべきか？」と真つ向から問いかけ、章ごとに答を出していきます。

本書は、オックスフォード大学の臨床心理学者、デイヴィッド・クラークと著名な労働経済学者、リチャード・レイヤードが二〇一四年に出版した『Thriving: The power of psychological therapy』の全訳です。幸せな社会を創生するためのIAPTの壮大な仕

組みとデータの裏づけに驚きを覚えます。イギリス政府は、クラークとレイヤードが一〇年を費やして綿密に検討した構想を受け入れ、国の予算を投下し、二〇〇八年からIAPT政策を実行しました。

本書はその二〇〇八年から二〇一三年までの五年間のIAPTの活動をわかりやすく解説しています。国がメンタルヘルス政策に心理療法を取り込み、最初の五年間で五〇〇〇人のセラピストを養成し、精神疾患に苦しむ人々に無料で有効な心理支援を提供するという健康政策は前代未聞でしょう。

心の健康と身体の健康を対等に考える

IAPTは、不安と抑うつの問題などで生活の質が低下しているすべての人に対して、治療効果の高い心理療法を無料で提供するという大規模な国家計画です。個人の福祉が国の健康のバロメータになることを説

き、心の健康と身体の健康を対等に考えることを健康政策の土台とします。貧困や民族的マイノリティ、あるいは社会的偏見により心理療法を受ける機会に恵まれなかった人々が、平等に直接相談できるようになったのです。

エビデンスのある心理療法として、認知行動療法や対人療法などが提供されますが、問題の重症度に合わせ適切な対応があります。不安障害とうつ病に対する心理療法の効果がすでに実証済みであることもIAPTの推進を助けています。

IAPTの実績はデータが語るって

IAPTプロジェクトは個々の相談者からアセスメントと治療経過および結果のデータを集め、分析評価の対象としています。二〇一九年時点で、イギリスでは年間九五万人が地域のIAPTプロジェクトに支援を求め、養成されたセラピストも一

万人を数え、セラピストのスーパーヴィジョンも必須です。心理療法を受けた人の回復率が二〇一七年に目標の五〇％に達したことが公表されました。

原書について、認知療法を開発した精神医学者のアロン・ベックは「問題の本質を誰にとっても分かりやすく解説している」と述べ、ノーベル賞を受賞したダニエル・カーネマンは「社会にアクションを促すサクセス・ストーリーだ」と共に原著の表紙裏に賛辞を呈しています。

監訳者の丹野義彦氏によるあとがきもタイムリーで、日本の心理職の動向を踏まえ、未来に向けた貴重な観測が含まれています。イギリスのIAPTを知ること、エビデンスに基づく健康政策を考え、「心理療法がひろく未来」への確かな手がかりを探ってみてはいかがでしょうか。

(2019年7月1日現在)

◆北海道

北海道大学大学院教育学院
札幌学院大学大学院臨床心理学研究科
札幌国際大学大学院心理学研究科
北翔大学大学院人間福祉学研究科
北星学園大学大学院社会福祉学研究科
北海道教育大学大学院教育学研究科 *

◆東北

岩手大学大学院総合科学研究科
岩手県立大学大学院社会福祉学研究科 *
東北大学大学院教育学研究科
尚絅学院大学大学院総合人間科学研究科
東北福祉大学大学院総合福祉学研究科
秋田大学大学院教育学研究科
山形大学大学院地域教育文化研究科
福島大学大学院人間発達文化研究科
医療創生大学大学院人文学研究科
福島学院大学大学院心理学研究科

◆関東

茨城大学大学院教育学研究科
筑波大学大学院人間総合科学研究科
常盤大学大学院人間科学研究科
作新学院大学大学院心理学研究科
東京福祉大学大学院心理学研究科
跡見学園女子大学大学院人文学研究科
埼玉学園大学大学院心理学研究科
埼玉工業大学大学院人間社会研究科
駿河台大学大学院心理学研究科
東京国際大学大学院臨床心理学研究科
人間総合科学大学大学院人間総合科学研究科
文京学院大学大学院人間学研究科
文教大学大学院人間科学研究科
立教大学大学院現代心理学研究科
早稲田大学大学院人間科学研究科
川村学園女子大学大学院人文学研究科
淑徳大学大学院総合福祉研究科
聖徳大学大学院臨床心理学研究科
放送大学大学院文化科学研究科 *
帝京平成大学大学院臨床心理学研究科 **
お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

東京大学大学院教育学研究科
青山学院大学大学院教育人間科学研究科
桜美林大学大学院心理学研究科
大妻女子大学大学院人間文化研究科
学習院大学大学院人文学研究科
国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科
駒沢女子大学大学院人文学研究科
駒澤大学大学院人文学研究科
上智大学大学院総合人間科学研究科
昭和女子大学大学院生活機構研究科
白百合女子大学大学院文学研究科
聖心女子大学大学院文学研究科
創価大学大学院文学研究科
大正大学大学院人間学研究科
帝京大学大学院文学研究科
東京家政大学大学院人間生活学総合研究科
東京女子大学大学院人間科学研究科
東京成徳大学大学院心理学研究科
東洋英和女学院大学大学院人間科学研究科
日本大学大学院文学研究科
法政大学大学院人間社会研究科
武蔵野大学大学院人間社会研究科
明治学院大学大学院心理学研究科
明治大学大学院文学研究科
明星大学大学院人文学研究科

目白大学大学院心理学研究科
立正大学大学院心理学研究科
ルーテル学院大学大学院総合人間科学研究科
東京学芸大学大学院教育学研究科 *
首都大学東京大学院人文学研究科 *
中央大学大学院文学研究科 *
横浜国立大学大学院教育学研究科
神奈川大学大学院人間科学研究科
北里大学大学院医療系研究科
専修大学大学院文学研究科
東海大学大学院文学研究科
日本女子大学大学院人間社会研究科

◆中部

上越教育大学大学院学校教育研究科
新潟青陵大学大学院臨床心理学研究科
新潟大学大学院現代社会文化研究科 *
金沢工業大学大学院心理学研究科
仁愛大学大学院人間学研究科
山梨英和大学大学院人間文化研究科
信州大学大学院教育学研究科
岐阜大学大学院教育学研究科
東海学院大学大学院人間関係学研究科
静岡大学大学院人文社会科学研究科
常葉大学大学院健康科学研究科
愛知教育大学大学院教育学研究科
名古屋大学大学院教育発達科学研究科
名古屋市立大学大学院人間文化研究科
愛知学院大学大学院心身科学研究科
愛知淑徳大学大学院心理医療科学研究科
金城学院大学大学院人間生活学研究科
福山女学院大学大学院人間関係学研究科
中京大学大学院心理学研究科
同朋大学大学院人間福祉研究科
日本福祉大学大学院社会福祉学研究科
人間環境大学大学院人間環境学研究科
鈴鹿医療科学大学大学院医療科学研究科

◆近畿

京都大学大学院教育学研究科
京都教育大学大学院教育学研究科
京都光華女子大学大学院心理学研究科
京都女子大学大学院発達教育学研究科
京都先端科学大学大学院人間文化研究科
京都橘大学大学院健康科学研究科
京都ノートルダム女子大学大学院心理学研究科
京都文教大学大学院臨床心理学研究科
同志社大学大学院心理学研究科
花園大学大学院社会福祉学研究科
佛教大学大学院教育学研究科
龍谷大学大学院文学研究科
関西大学大学院心理学研究科 **
帝塚山学院大学大学院人間科学研究科 **
大阪大学大学院人間科学研究科
大阪市立大学大学院生活科学研究科
大阪府立大学大学院人間システム科学研究科

追手門学院大学大学院心理学研究科
大阪経済大学大学院人間科学研究科
大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科
関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究科
近畿大学大学院総合文化研究科
梅花女子大学大学院現代人間学研究科
立命館大学大学院人間科学研究科
神戸大学大学院人間発達環境学研究科
兵庫教育大学大学院学校教育研究科
関西国際大学大学院人間行動学研究科
甲子園大学大学院心理学研究科
甲南女子大学大学院人文学総合研究科
甲南大学大学院人文学研究科
神戸学院大学大学院人間文化学研究科

神戸松蔭女子学院大学大学院文学研究科
神戸女学院大学大学院人間科学研究科
神戸親和女子大学大学院文学研究科
武庫川女子大学大学院文学研究科
奈良女子大学大学院人間文化研究科
帝塚山大学大学院心理学研究科
天理大学大学院臨床人間学研究科
奈良大学大学院社会学研究科

◆中国

鳥取大学大学院医学系研究科
島根大学大学院教育学研究科
岡山大学大学院社会文化科学研究科
川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科
吉備国際大学大学院心理学研究科
就実大学大学院教育学研究科
ノートルダム清心女子大学大学院人間生活学研究科
広島国際大学大学院心理学研究科 **
広島大学大学院教育学研究科
比治山大学大学院現代文化研究科
広島修道大学大学院人文学研究科
広島文教女子大学大学院人間科学研究科
安田女子大学大学院文学研究科
山口大学大学院教育学研究科
宇部フロンティア大学大学院人間科学研究科
東亜大学大学院総合学術研究科

◆四国

徳島大学大学院総合科学教育部
鳴門教育大学大学院学校教育研究科
徳島文理大学大学院人間生活学研究科
香川大学大学院教育学研究科
愛媛大学大学院教育学研究科

◆九州

九州大学大学院人間環境学府 **
九州大学大学院人間環境学府
福岡県立大学大学院人間社会学研究科
九州産業大学大学院国際文化研究科
久留米大学大学院心理学研究科
西南学院大学大学院人間科学研究科
福岡女学院大学大学院人文学研究科
福岡大学大学院人文学研究科
西九州大学大学院生活支援科学研究科
長崎純心大学大学院人間文化研究科
大分大学大学院教育学研究科
別府大学大学院文学研究科
鹿児島大学大学院臨床心理学研究科 **
鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科
志學館大学大学院心理臨床学研究科

◆沖縄

沖縄国際大学大学院地域文化研究科
琉球大学大学院人文社会科学研究科 *

- 臨床心理士になるには、財団法人日本臨床心理士資格認定協会が指定する上記大学院（以下、指定大学院）を修了し、「臨床心理士資格審査」の受験資格を取得しなければなりません。
- 臨床心理士養成大学院は「第1種指定校」「第2種指定校」「専門職大学院」の3種があります。上記一覧で*つきは第2種指定校、**つきは専門職大学院、無印は第1種指定校です。
- 第1種指定校の場合、大学院修了後に直近の試験を受験することができます。第2種指定校の場合、受験資格を得るためには実務経験1年が必要です。専門職大学院は第1種と同じ扱いですが、試験科目のうち小論文が免除されます。

公認心理師養成機関の情報 (2019年10月1日時点)

◆大学・大学院 (50音順).....

愛知学院大学心身科学部、同大学院心身科学研究科
愛知教育大学教育学部、同大学院教育学研究科
愛知みずほ大学人間科学部
青山学院大学教育人間科学部、同大学院教育人間科学研究科
秋田大学教育文化学部、同大学院教育学研究科
跡見学園女子大学心理学部、同大学院人文科学研究科
茨城キリスト教大生活科学部
医療創生大学教養学部(2020年度より心理学部〔予定〕)、
同大学院人文科学研究科
岩手県立大学社会福祉学部、同大学院社会福祉学研究科
宇都宮フロンティア大学人間社会学部、同大学院人間科学研究科
江戸川大学社会学部
桜美林大学健康福祉学群/リベラルアーツ学群、同大学院心理学研究科
大分大学福祉健康科学部、同大学院教育学研究科
大阪大学人間科学部、同大学院人間科学研究科
大阪経済大学人間科学部、同大学院人間科学研究科
大阪府立大学現代システム科学域、同大学院人間社会システム科学研究科
沖縄国際大学総合文化学部、同大学院地域文化研究科
お茶の水女子大学生活科学部、同大学院人間文化創成科学研究科
金沢大学人間社会学域
金沢工業大学情報フロンティア学部、同大学院心理学研究科
鎌倉女子大学児童学部、同大学院児童学研究科
関西福祉科学大学心理学部/健康福祉学部、同大学院社会福祉学研究科
関西学院大学文学部、同大学院文学研究科
北里大学医療衛生学部、同大学院医療系研究科
九州産業大学人間科学部、同大学院国際文化研究科
九州保健福祉大学社会福祉学部
九州ルーテル学院大学文学部
京都大学大学院教育学研究科
京都光華女子大学健康科学部、同大学院心理学研究科
京都先端科学大学文学部、同大学院人間文化研究科
京都橘大学健康科学部、同大学院健康科学研究科
京都文教大学臨床心理学部、同大学院臨床心理学研究科
杏林大学保健学部
金城学院大学人間科学部、同大学院人間生活学研究科
久留米大学文学部、同大学院心理学研究科
甲子園大学心理学部、同大学院心理学研究科
甲南大学全学部で対応
甲南女子大学人間科学部、同大学院人文科学総合研究科
神戸大学国際人間科学部、同大学院人間発達環境学研究科
神戸医療福祉大学社会福祉学部
神戸学院大学心理学部、同大学院心理学研究科
神戸松蔭女子学院大学人間科学部、同大学院文学研究科
神戸女学院大学人間科学部、同大学院人間科学研究科
駒沢女子大学人間総合学群、同大学院人文科学研究科

埼玉学園大学人間学部、同大学院心理学研究科
埼玉工業大学人間社会学部、同大学院人間社会研究科
札幌学院大学心理学部、同大学院臨床心理学研究科
志學館大学人間関係学部、同大学院心理臨床学研究科
四国大学生活科学部
静岡大学人文社会科学部、同大学院人文社会科学研究科
静岡福祉大学社会福祉学部
島根大学人間科学部、同大学院教育学研究科
就実大学教育学部、同大学院教育学研究科
十文字学園女子大学人間生活学部
淑徳大学総合福祉学部、同大学院総合福祉研究科
白梅学園女子大学子ども学部
白百合女子大学人間総合学部、同大学院文学研究科
仁愛大学人間学部、同大学院人間学研究科
福山学園大学人間関係学部、同大学院人間関係学研究科
鈴鹿医療科学大学保健衛生学部、同大学院医療科学研究科
駿河台大学心理学部、同大学院心理学研究科
聖泉大学人間学部
清泉女学院大学人間学部
聖徳大学心理・福祉学部、同大学院臨床心理学研究科
西南学院大学人間科学部、同大学院人間科学研究科
専修大学人間科学部、同大学院文学研究科
大正大学心理社会学部、同大学院人間学研究科
筑紫学園大学人間科学部、同大学院人間科学研究科
中京大学心理学部、同大学院心理学研究科
中部大学文学部
筑波大学人間学群、同大学院人間総合科学研究科(2020年度より心理学学位プログラム〔予定〕)
帝京大学文学部、同大学院文学研究科
帝京平成大学健康メディカル学部、同大学院臨床心理学研究科
帝塚山大学心理学部、同大学院心理学研究科
帝塚山学院大学人間科学部、同大学院人間科学研究科
田園調布学園大学人間科学部、同大学院人間学研究科
天理大学人間学部、同大学院臨床人間学研究科
東亜大学人間科学部、同大学院総合学術研究科
東海大学文化社会学部、同大学院文学研究科
東京家政大学文学部、同大学院人間生活学総合研究科
東京女子大学現代教養学部、同大学院人間科学研究科
東京成徳大学応用心理学部、同大学院心理学研究科
東京福祉大学心理学部/社会福祉学部、同大学院心理学研究科
東京未来大学子ども心理学部/モチベーション行動科学部
同志社大学心理学部、同大学院心理学研究科
同朋大学社会福祉学部、同大学院人間福祉研究科
東北学院大学教養学部
東北福祉大学総合福祉学部、同大学院総合福祉学研究科
東洋英和女学院大学人間科学部、同大学院人間科学研究科
東洋学園大学人間科学部
徳島文理大学人間生活学部、同大学院人間生活学研究科
長崎純心大学文学部、同大学院人間文化研究科
長野大学社会福祉学部
名古屋市立大学人文社会学部、同大学院人間文化研究科
奈良大学社会学部、同大学院社会学研究科

鳴門教育大学大学院学校教育研究科
新潟青陵大学福祉心理学部、同大学院臨床心理学研究科
新潟リハビリテーション大学医療学部、同大学院リハビリテーション研究科
日本大学文学部、同大学院文学研究科
日本女子大学人間社会学部、同大学院人間社会研究科
日本福祉大学子ども発達学部、同大学院社会福祉学研究科
人間環境大学人間環境学部、同大学院人間環境学研究科
梅花女子大学心理こども学部、同大学院現代人間学研究科
白鷗大学教育学部
花園大学社会福祉学部、同大学院社会福祉学研究科
広島大学教育学部、同大学院教育学研究科(2020年度より人間社会科学研究科〔予定〕)
広島国際大学心理学部、同大学院心理科学研究科
広島文教大学人間科学部、同大学院人間科学研究科
福岡大学文学部、同大学院人文科学研究科
福岡県立大学人間社会学部、同大学院人間社会学研究科
福島大学人間発達文化学類、同大学院人間発達文化研究科
文教大学人間科学部、同大学院人間科学研究科
文京学院大学人間学部、同大学院人間学研究科
別府大学文学部、同大学院文学研究科
放送大学教養学部(全ての科目が開講されるのは2022年度より〔予定〕)
北翔大学教育文化学部、同大学院人間福祉学研究科
北海道大学教育学部、同大学院教育学研究科
武庫川女子大学文学部、同大学院文学研究科
武蔵野大学大学院人間社会研究科
明治大学文学部、同大学院文学研究科
明治学院大学心理学部、同大学院心理学研究科
明星大学心理学部、同大学院文学研究科(2020年度より心理学研究科〔予定〕)
目白大学人間学部(2020年度より心理学部〔予定〕)、同大学院心理学研究科
安田女子大学文学部、同大学院文学研究科
山形大学地域教育文化学部、同大学院地域教育文化研究科
立教大学現代心理学部、同大学院現代心理学研究科
立正大学心理学部、同大学院心理学研究科
立命館大学総合心理学部、同大学院人間科学研究科
琉球大学人文社会学部、同大学院人文社会科学研究科
龍谷大学文学部、同大学院文学研究科
ルーテル学院大学総合人間学部、同大学院総合人間研究科
早稲田大学人間科学部、同大学院人間科学研究科
和洋女子大学文学部

◆公認心理師法第7条第2号に規定する認定施設 弘前愛成会病院

●本一覧は、日本公認心理師養成機関連盟の2019年度正会員調査で「2019年10月1日時点で既にカリキュラムを開始している」と回答いただいた大学・大学院(学部等名・研究科等名まで)および認定施設です。詳細は、連盟のホームページに掲載されています。

追悼 成瀬悟策先生

成瀬先生の思い出



成瀬先生を想う

九州大学名誉教授 前田重治

先生とはじめて出会ったのは、昭和二九年に東京教育大学の研究室に表敬訪問したときである。そのころ九大精神科で、蔵内宏和さんと二人で催眠の研究に凝っていたので、催眠学の先輩へのご挨拶ということにかこつけて、われわれの催眠の成果を、先生に誇示しなくては行つたものである。

先生は私よりも三つか四つ年上で、「助手」だった。しかし何だか教授みたいな貫禄を感じた。にこやかに迎えられて、数名の大学院生との催眠研究会に参加させてもらったり、自宅にまで招いて歓待を受けたりした。

そのち昭和三二年に、成瀬先生と、慈恵医大の竹山恒寿先生と組んで、「日本催眠学会」を設立した。そのときに開催した催眠講習会から、その後のわが国の催眠研究者の多くが育つてゆくことになった。

成瀬先生が、『催眠面接法』（誠信書房、一九六八年）というテキスト

を書かれているという話を聞いて、ライバル意識を燃やしながら、蔵内さんと二人で『現代催眠学』（慶應義塾大学出版会、一九六〇年）を書き上げたが、出版にひまどつて、一年後れたのは残念だった。

その後、私は精神科から心療内科に移って催眠などやっていたが、そのころ先生は九大の教育学部に赴任されてきた。医局の研究会などにも顔を出されるようになって、福岡での奇遇を喜んだ。そしていつか先生と飲んでいたとき、私が「心療内科は忙しすぎて、ゆっくり精神分析がやれない」などとぼやいた。すると、「今ちょうど、池田数好教授のカウンセリング講座の席が空いているから、移ってきたら」と勧められた。それで私は昭和四一年に、教育学部に移ることにした。三六歳だった。なにしろ催眠の大師所が、隣の研究室で催眠を用いて動作法の研究を進められていたので、私はきつぱりと催眠は止めることにした。もともと

と物好きではじめたものだったので、精神分析に専念することにした。今にして思えば、このように成瀬先生は私の運命に大きく関わられてきたものである。

その後、先生とともに、京大、広島大と組んだ「三大学院合宿研修会」をつづけたり、「日本心理臨床学会」の設立に関与したり、「九州臨床心理学会」を立ち上げたりしてきたが、先生はいつもリーダーシップを発揮され、そのエネルギーにこちらも乗せられたものである。先生と親しくしていたので、初期の学会とか研修会などでの合宿があると、同じ部屋に寝泊まりすることも多かった。話の好きな先生だったので、床の中でいろいろな話を聞いて啓発されることも多かった。

そもそも私とは性格がまったく違って、若い頃には獵銃をかついで山野を駆け巡るのが好きだったそうだし、人ざわりのいい柔らかな口調で社交性に富んでおられて、誰と

でもすぐに親しくなられていたし、人を集めてそのリーダーになるのもお好きなようだった。事によらず、頼りになる存在だった。本質的に、典型的な男性的性格だったと思う。

こうして先生の定年まで二五年近くも身近にいて、ときには先生に異論をさしはさむこともあったが、ケンカしたことは一度もなかった。先生は、外向きの行動主義であったし、こちらは内向きの深層心理というわけで、まったく次元は違っていたが、ときには「イメージ」の研究などを、一緒にやってきたこともある。

ここに久しぶりに、ありし日の先生のお姿を思い出して懐かしんでいる。

成瀬悟策先生からいただいた学恩に心から感謝

九州大学名誉教授・東亜大学大学院教授

村山正治

私は一九七四年四月九州大学教育学部カウンセリング講座助教授に就任し、一九九七年定年退官まで二三年間九州大学教育学部教員として勤務しました。この間 成瀬先生から多大な学恩をいただきました。その一端を披露して私の感謝の気持ちとさせていただきます。

就任早々のころ、成瀬先生からお声がかかり、研究室に招いていただき、一時間ほど歓談したことを覚えていません。お菓子とお茶をいただきます。「村山君。学部の教員は自分のお店を出すことなんだよ」といわれました。「前職の九大教養部と違うぞ」といわれた感じがしました。なんだか身が引き締まる感じを覚えています。私のイメージでは「お店を出すとは、デパートの専門店のようにそこでないと買えない商品売ってる店」と理解しました。私は帰国したら、CSPのロジャース研究所で学んだエンカウンターグループ（EG）とフォーカシングを研究したい

と決めていましたので、改めて「この二領域がこれから私が開拓する専門領域」と心に決めました。先生のことばが私の背中を押してくれました。

幸い以後、院生たちが全国から集まってきたので、EGの実践と研究を再開しはじめました。ある年の修論・博論の公聴会の時でした。院生・学部生の発表を聞いていた先生が「村山君。そろそろEGの理論をこさえたら」と助言されました。「こさえる」という先生独特のいい回しの言葉を含めても鮮明におぼえています。これまで多数の独創的な仕事をされてきた先生でないといえない言葉です。これを機に私は、野島一彦さんとEGのプロセス理論・ファシリテーター論・事例をまとめる作業を展開しました。「独創」の味をチョッパリ楽しむことができました。ご示唆に心から感謝しています。「こさえる」スピリットを忘れないようにしたいです。

これも初期のころと思います。成瀬先生が動作法の開発をされていたころです。ある教授の送別会でした。帰途、たまたま先生とタクシーで一緒になりました。先生はさりげない調子で「村山君。明日は整形外科医の大会で、動作法を説明し、整形外科医と対決することになっている」といわれました。その時の先生のなんといいか凛とした、落ち着いた語り口、落ち着いた強さが印象に残っています。

私は一九八六年文科省在外研究員で UCLA に滞在していました。ある時先生から手紙が来て「エリクソン財団主催の二一世紀の心理療法大会があるので参加しませんか」とのお誘いでした。アメリカにいなながらこの大会は全く知りませんでした。このおかげで、ロジャースを含めた当時の二七名の世界的に著名な心理療法家達にあらうことができました。個人的にはロジャースの「生前最後」の大講演を聞く機会を得たこと

がたいへんありがたかったです。このように、先生は見守り、グッドタ イミングで誘いをかけていただき、私に成長する機会を創っていただきました。

最後に、日本心理臨床学会の設立の時です。第一回大会が九大で開催されるまでいろいろなことがありました。リサーチ中心の日本心理学会に対して事例研究を中心とした本学会が成立した学問的背景には、実験心理と臨床事例の両者に理解を持つ成瀬先生と河合先生の深い相互理解があつたことが大きいと私は信じています。

成瀬先生の生前の学恩にたいして心から感謝申し上げ、先生のご冥福を心からお祈りします。

偉大なる成瀬先生の思い出

東京大学教育学研究科教授 下山晴彦

私にとって、成瀬先生は親戚の、長老の大叔父様といった存在だった。お会いする機会は少なかったが、思えば一杯ある。しかも、どれも強烈である。

一九九五年の九州大学主催第一四回日本心理臨床学会大会の会場で座長の成瀬先生は、フロアからの質問に対して逆質問をして、質問者を立ち往生をさせていた。私は、その場で母校に教員として着任したご挨拶をした。それに対して成瀬先生は「今夜、我が家に来なさい」と鶴の一声。

築港のマンションには九大関係の皆様が集まり、お盆の親戚の集まりのような宴会。私の祖母の弟が鈴木清とって東京教育大学の心理学教授や心理学会長をした人で、成瀬先生の親しい先輩であった。それで、その話で盛り上がった。

一緒に行った私の研究室の女子学生（現駒沢女子大学藤川麗教授）が

成瀬先生に直々に動作法を施術されて、嬉しい悲鳴を上げていた。

二〇〇〇年頃、心理職の国家資格化を巡って日本心理臨床学会と日本心理学会の幹部がいろいろと難しい交渉をしていた。そのような時期の日曜日の早朝に、家人が「奇妙な電話がかかってきた」と言う。「ナルセだ」としか言わないというのである。

私は、「やばい！ 成瀬先生だ」と思っただ一目散に電話口に向かった。「今日これから心理学会系の会合で国家資格関連の話をするのだが、君の情報と意見を聞かせてくれ」というものであった。

狩猟やスキーが御趣味で豪放磊落な印象のある成瀬先生だが、とても繊細に情報を集め、慎重に緻密な計画を立てておられた。

その頃、私は、日本臨床心理士資格認定協会の仕事として、英国の複

数の大学の臨床心理学やカウンセリングのコースを訪問し、心理職のカリキュラムの調査研究をしていた。その報告を、京都で文科省との共催で行われた臨床心理士養成カリキュラムのシンポジウムで発表した。「臨床心理士はもっと社会性をもつべきである」という私の発言に河合準雄先生が激昂した。当時の認定協会の木田宏会頭が目を丸くして驚いておられた。

その時、最前列におられた成瀬先生が挙手されて「下山さん、謝ったほうがいいよ」とアドバイスをくださった。壇上で河合先生にお詫びをしたのを、今のように思い出す。

成瀬先生は、二〇一四年に大著『動作療法の展開』（誠信書房）を出版された。私は、その年の日本心理臨床学会第三三回秋季大会で「臨床動作法を追い求めて」というテーマで成瀬先生と対談をさせていただいた。

丁寧なお手紙をいただいたこと、鶴光代先生も交えて事前にお会いして打ち合わせをしたこと、先生が最新のマインドフルネスをしつかり勉強されていたのに驚いたことなど、懐かしい思い出である。九〇歳の成瀬先生は、饗饌としておられステーキを美味しそうに食されていた。

成瀬先生のような不世出の先生の驚咳に接する事ができたことは、つくづく幸せであると思う。先生の偉大さに比較して自分が如何に愚かで、しかも若造でしかないかを身にしみて自覚できるからである。

ご冥福をお祈りしつつ、いつ、またお電話やお手紙を突然いただけるのではないかと思ったりしている。合掌。

若き日の成瀬悟策先生の思い出

東京大学名誉教授・国際医療福祉大学教授

亀口憲治

成瀬先生との出会いは、今から五〇年以上も遡る一九六七年のことでした。当時、九州大学教育学部二年生だった私は、先駆的な試みであった脳性まひ児を対象とした心理リハビリテーションの活動にボランティアとして参加しました。まだ、臨床心理学のイロハも学んでいない初学者であるにもかかわらず、四〇代前半の成瀬先生や先輩の院生諸氏と一緒に、障害をかかえた子供たちの不自由さを、心理的手法で改善しようとする意欲的な実践研究に参加できたことは大きな喜びでした。

六〇年代後半はベトナム戦争に反対する学生運動が全国の大学に拡大し、九州大学でも休講が続ぎ、講義を受けられない事態に陥っていました。それによつてはからずも生じた「時間的余裕」を活用すべく、成瀬先生が指導する脳性まひ児とその保護者を対象とした一週間の集中訓練キャンプに参加しました。複数の大学の教員、大学院生、学部生、障害

施設職員、養護学校教員等の混成チームに加わったことは、とても貴重な体験となり、心の糧となりました。七〇年代には、福岡市に隣接する朝倉町に開設された民間の休養施設「やすらぎ荘」が、その主な実践活動の舞台となりました。やがて、全国から訓練キャンプ開催の要請があり、多い年には年に三〜四回も各地の訓練キャンプに参加することもありました。一九七九年には、成瀬先生や仲間とともに韓国・大邱市の大学構内で開催された訓練キャンプに参加し、多くの地元の人々と生活を共にしたことを懐かしく思い出します。

心理リハビリテーションの発想の原点にもなっているのが、成瀬先生の催眠や暗示に関する基礎研究や臨床技法の開発にあることは、言うまでもありません。幸い、院生時代には催眠誘導に関する実習指導を直接受ける機会があり、それを土台として自分なりに折に触れて、その技を磨

くように修練を重ねてきました。わが国では、あまり知られていないこともかもしれませんが、家族療法の理論や技法の発展には、催眠療法家ミルトン・エリクソンの臨床実践が大きな影響を与えているのです。

そのミルトン・エリクソンの知己でもあった成瀬先生が、彼から贈呈された論文集を我々院生に紹介してくれたことがありました。そこに記された数々の臨床実践のユニークさに、心底圧倒されたことを、今でも鮮明に覚えています。その時点では、まだ私自身は家族療法のことを全く知らなかったのですから、何か運命的なものさえ感じます。一九八〇年から一九八二年の間、私がフルブライト研究員としてニューヨーク州立大学ストーニーブルック校心理学部に在籍中に、成瀬先生のご理解や、その他いくつもの幸運に恵まれ、アツカーマン家族療法研究所のスタッフから家族療法の養成訓練を受けることができました。帰国後は、日本

での家族療法の発展に多少とも貢献したいと考え、微力を尽くしてきました。

最近では、成瀬先生とお会いするのは、心理臨床学会の年次大会の折などに限られていました。いつか、ゆっくり昔語りをしたいものだと思います。先生のご冥福をお祈りします。



編集後記

今号にはこれまでの「臨床心理士資格審査の受験資格を取得することができる大学院一覽」に加えて新しく「公認心理師の資格審査の受験資格を取得することができる大学・大学院一覽」を掲載することとなりました。現在も公認心理師の資格取得のためのカリキュラムを整備している大学や大学院はありますので、今回の一覽はまだ全体を把握したものではありませんが、現在のところわかっているものを掲載しました。皆様の参考になればと思います。

今号は、特集として「受験の心理学」に「心理臨床のフィクションとリアル」を取り上げました。受験に関してはこれまで取り上げたことのない領域ですが、受験をする子どもだけでなく、その家族にも多くのプレッシャーがかかり悩みが発生するものです。また受験に受かったことや受からなかったことから派生する様々な心理的な問題、悩みもあります。このような内容について心理職として何ができるのか現状はどうなっ

ているのかについて考察した大変貴重な特集となりました。二つ目の特集ですが、これまで様々なメディアで心理臨床、カウンセラー等が描かれてきました。また、心理の専門職ではないけれど、そのような役割を果たしている人について描かれたものもあります。それらを取り上げ、実際の心理臨床と違うのか、また似ているのかについて考えました。これは社会に向けて私たちが自分たちのことを十分説明できているのか、理解を得られているのかを知る手がかりともなりました。

また、今号には昨年末にご逝去された成瀬悟策先生の追悼記事も掲載しました。日本の心理臨床にとって大変重要な先生であり、臨床心理士の誕生にも大いに貢献された先生でした。先生のご冥福をお祈り申し上げます。

(編集委員長 葛西真記子)

事務局だより

二〇二一年に、日本心理臨床学会は誕生から四〇周年を迎えます。第一回学術大会は九州大学で開催(参加者七五七名)されました。ジェンドリンが特別講演を行っていました。しかし講演の内容は全く思い出すことができません。彼が意外と若かったということと、懇親会の時に大きな和太鼓を叩いていた姿はよく覚えています。大会実行委員長は成瀬悟策先生でした。そして大会事務局は助手と私たち大学院生がお手伝いをいたしました。

あれから四〇年近くがたちました。自分がこの学会のお世話をする事になるうとは夢にも思いませんでした。初代理事長だった成瀬悟策先生も、九五歳の生涯を閉じられました。河合圭雄先生をはじめ、日本心理臨床学会の礎を築いてきた先生方も、鬼籍に入られた方が多くいらっしゃいます。心理の資格をめぐる四〇年間だったのかもしれない。やっと二〇一八年から国家資格の公認心理師が認定されるようになり、この国家資格は、紆余曲折しての誕生であり、多くの先達の熱意と努力の結晶だと思います。

発足当時の大会運営は担当大学に大きく依存していました。パソコンも十分ではなく、ましてEメールもありませんでした。とにかく手作り感あふれる学術大会でした。今や会員数は二万九〇〇〇名を超え、心理学関係では最大の学会となりました。とても大学だけのお世話できる規模ではありません。現在では、事務局員六名が様々な業

務を担当しています。二〇二〇年は横浜国立大学、二〇二一年はお茶の水女子大学が、学術大会の担当校になりました。いずれも会場はパシフィコ横浜になります。四〇周年に向けての企画も検討しているところで、会員の皆様とともに日本心理臨床学会のこれまでを振り返り、あらたな心理臨床学の研究と実践のあるべき姿を考える節目にできればと願っています。

(副理事長 井村修)

心理臨床の広場 24

Vol. 12 No. 2
2020年3月30日発行

- 広報委員 岩倉拓 桑原知 子子子
葛西真記子 津川律 子子子
秋田恭志 西河正 子子子
池田志保 西野泰 子子子
井ノ口敦子 野村れい 子子子
内田亮 見健太郎 子子子
佐藤宏平 松山聡貴 子子子
柴田彩花 山崎孝淑 子子子
園田雅一 山崎中 子子子
寺崎真一郎 山崎中 子子子
東畑開人 山崎中 子子子

● 編集協力 / 制作 株式会社創元社
〒541-0047 大阪市中央区淡路町4-3-6
TEL 06-6231-9010

● 発行 一般社団法人 日本心理臨床学会
〒100-0006 東京都千代田区有楽町2-10-1
東京交通会館5階
TEL 03-6273-4061 FAX 03-5223-2755
ホームページ URL <https://www.ajcp.info/>

● 印刷製本 株式会社太洋社

次回予告 (2020年8月発行)